霧の中にいるようです。

白く煙ってなにも見えないのですが

ただ居心地は良くて私はゆらゆら漂います。

この霧の中にはたくさんの人がいて

時たま気配だけが感じられます。

彼らに手を振れば

振り返してくれたりくれなかったりします。

ゆっくり霧に目を凝らすと

彼らは遊んだり作ったり

お互いを観察しあったりしているのがなんとなくわかります。

はっきり見えるのは自分の手元だけなのですが

それは彼らもそうなのだろうと思います。

もやにつつまれながら彼らは遊んでいます。

彼らの手に紡がれるものが彼らを繋いでいて

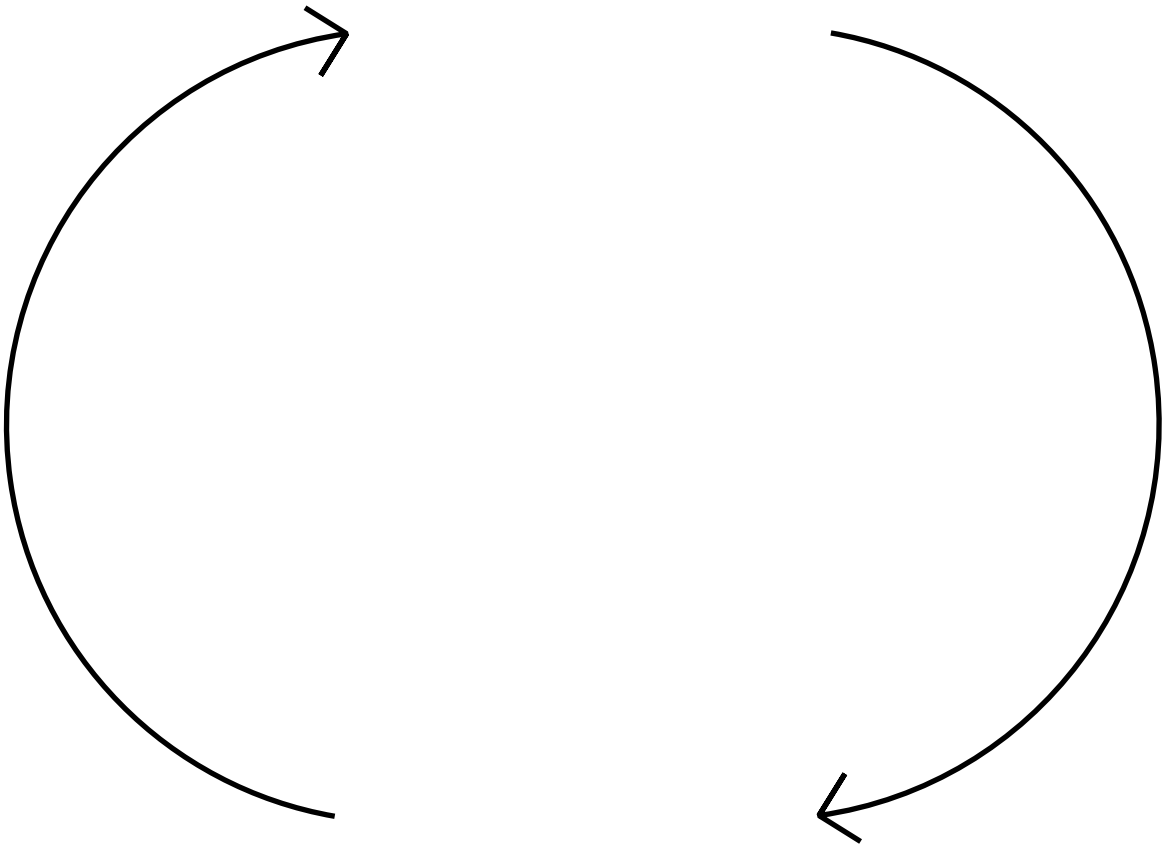
霧の中でそれはさまざまになりながら

見えたり見えなかったりします。

私はそれを感じながら

ゆらゆらと漂います。

OPEN



KITCHEN

作品ラリーについての説明

たんぽぽの家のアーティストと京都市立芸術大学の学生が
6つのペアを組み、作品を取り交わすプロジェクトです。
作品は箱の中に入って届けられ、つくり足すのも、つくり変えるのも、
別の作品を返すのも自由です。
こうしたやりとりは2016年夏より、現在まで続いています。
——
本展では、作品だけを提示するのではなく、
コンテクストの記録を映像や写真、交換ノートなど
様々なメディアとともに展示しました。

作品ラリーこれまでの流れ

2016年9月　「アート合コン」※京芸の学生がたんぽぽの家に宿泊し、お互いの作品を紹介したり、制作現場を見学する。

2016年11月　「ぼくの京芸紹介します。」※たんぽぽの家のアーティストが京芸を訪問し、学生のおすすめスポットを紹介する。

——

2017年3月　初めての「OPEN KITCHEN」展覧会［@KCUA］

——

2018年春　ペア確定

2018年夏　「OPEN KITCHEN 」合宿［たんぽぽの家］※たんぽぽの家に宿泊し、それぞれのペアで制作を行う。
たんぽぽのメンバーが京芸に遊びに来る

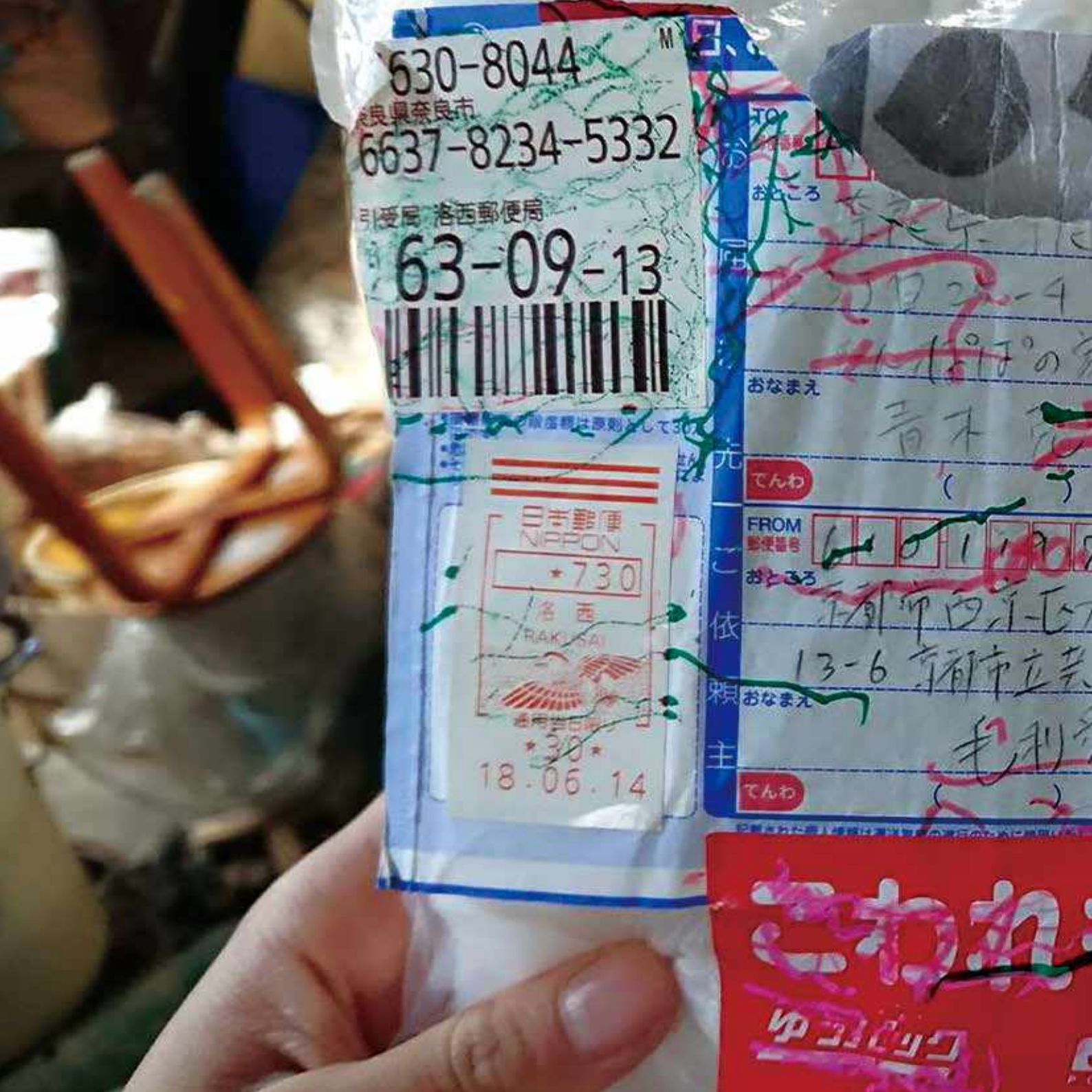
2018年冬　学生インタビュー

——

2019年3月　「OPEN KITCHEN」展覧会［ギャラリー崇仁］

2019年4月　「OPEN KITCHEN」展覧会［たんぽぽの家アートセンターHANAギャラリー］

初めての「OPEN KITCHEN」展覧会［@KCUA］の際のフライヤー


630-8044
奈良県奈良市
6637-8234-5332
引受局 洛西郵便局
63-09-13
日本郵便
NIPPON
*730
洛西
RAKUSAI
30
18.06.14
TO
おなまえ
てんわ
FROM
おなまえ
てんわ

配達希望日
月　日
受付日 30 年 6 月
配達予定日
月
配達希望時間帯
午前
12時～14時
14時～16時
16時～18時
18時～20時
20時～21時
様
様
品名(内容品)
(陶器)
アートプリー作品在中
社員確認用
こわれもの
なまもの
ピン類
逆さま厳禁
下積み厳禁
受付店
摘要
重
ちょう付用
郵便局
a 6 6 3 7 8 2 3 4 5 3 3 2 a
郵便局
天地無用

さいしょ

Open kitchen インタビュー

万葉さんインタビュー

-萩原さんはどういう人ですか？

すごくチャーミングな人で、年齢は私よりも上で小柄な人なんだけど、男の人で。

なんだけどなんていうか……すごいまずね剣道が好きでね、いつも「剣道やっとんねん。」って独特な喋り方で、「喧嘩はな、剣道はな、……」っていつも喋り出す独特な人なんだけど、作品がね、とにかく私好きで。ここに置いてあるんだけど、張り子みたいな作品で、こう……色彩がさきつくって、私きついのが好きだから。紙をさのりとかで付けると強度が増すでしょ。紙だから動きも出るわけ。萩さんの手の跡が、思いの丈とは違う、やっていたらついた。普通の人やったらさ、顔のお面を作る時って左右対称にするやんか。考えながらやってるのが思いつきでやってんのか、色も多分思いつきでやってるんやろうけど、いつも喋る時も作品作る時も、結構突拍子もないみたいな。私はどちらかというと考えて動くタイプだから、逆の羨ましいタイプである。だけど、無い物ねだりの人間を選んだわけだよね、私は。

色はね、作品は私も派手目の方だから、そういう意味では色彩面で似てるところがあるから、「あ！いけるかもしれない！」というのと、また萩さんの性格がフランクで。なんていうかね……「一緒にご飯食べよ～。」みたいなね、「うん。一緒に食べよっか。」っていう感じだから、友達みたいな感じ。っていう人だったから、萩さんを想像しながら設計図みたいなものをほぼ描かずに作った。

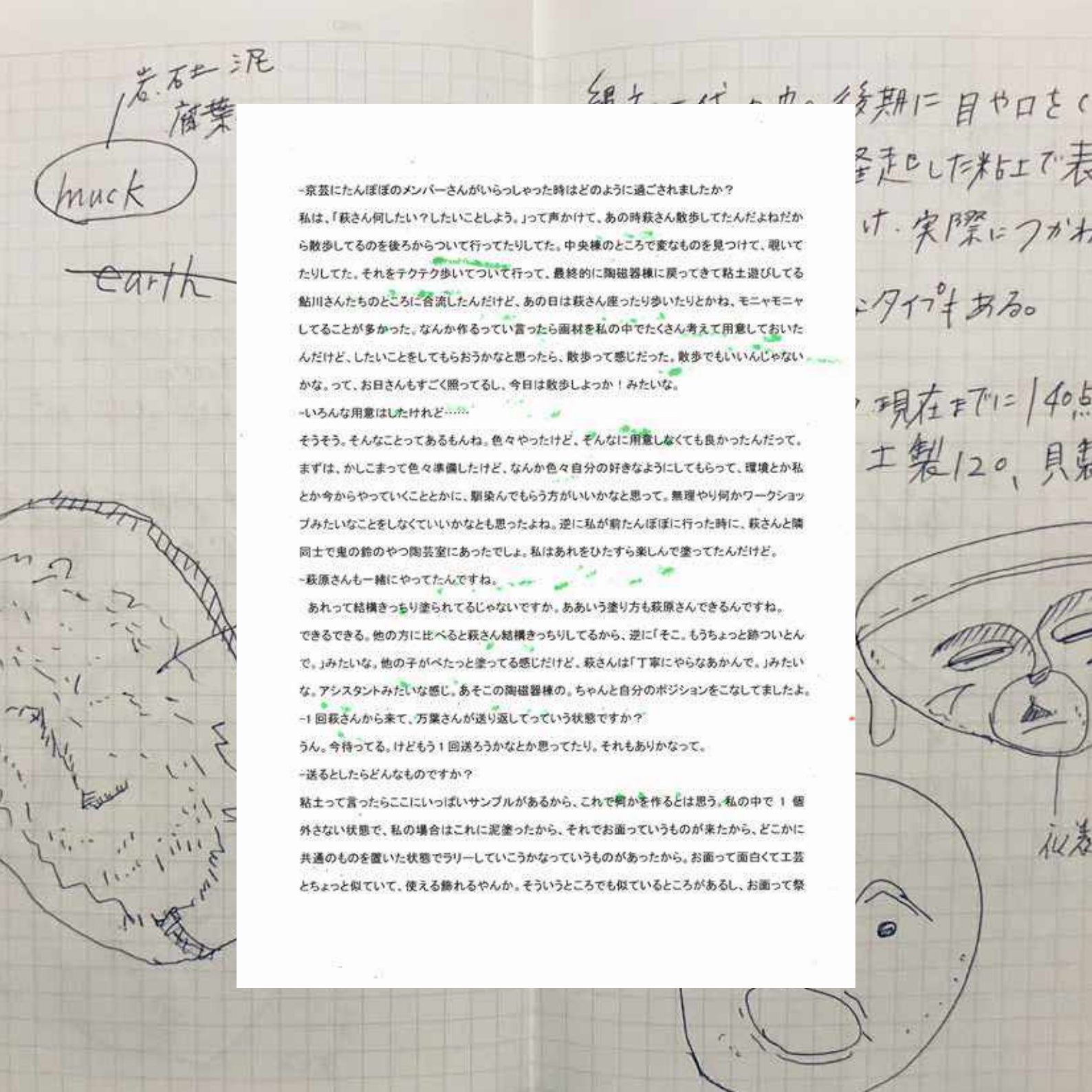
-いつも描かれてるんですか？

いつも大体作品作る時にコンセプトとテーマを 6 割ぐらい練る。色と寸法も決める。私がこんなに大きいの作ってても、1 割か 2 割で作っている。決まったら早いやん。私は特別手が早いから、だからしっかり考えたら手をパッと動かす。だからそこは順序を自分できちっと決めてる。だけど順序絶対決めてないから。こっちのね、萩さんは。っていうのが、私は順序決めないとできないところがあるな一っていうのがあった時に、本当はその計算がいるのかどうかっていうのに悩んでいた時期でもあったから、一番羨ましいと思っているのはね、突拍子もなく作品を作ったりとか、コンセプトとかテーマの前に手が動いたからできました！みたいなタイプが私とは違うタイプだから。本当はす

ごく羨ましくて、たんぽぽに最初は遊びに行ってただけだったんだけど。永守さんが来ない？って誘ってくれたからじゃあ行こうかなー。って。行ったらいつのまにか、参加するみたいになって、で、参加しようと思ったのがすごく多分自分にないものを、あの人たち萩さん含めて持ってて。京芸の子も私を含めて、たんぽぽに行ったら悩んでることがなんかもうバカらしくなるじゃないけど、作りたくってやりたくって日常の延長にあるような感じで制作してるやん。作らなくちゃやらなきゃっていう使命感だったりとか、やりたくないけどあの人に言われたから締め切りがあるからっていうのないやんか。本当はそれがしたいんだけど、できないから羨ましいなってすごい思って……とにかく羨ましい。羨ましすぎる性格を持っている萩さんが好きで組んだ。

–会話でのコミュニケーションは例えばどのような感じでしたか？

萩さんは結構、他の人もそうなんだけど、やっぱり一日の波があるやんか。比較的たんぽぽの人たちの中からするとちゃんとコミュニケーションが取れる方だと思う。言ってることに対して答えが返ってくる。この前とか「私の作品どう？」って聞いたら、「今やってんねん。紙全部貼るねん。」って言ってて。そのそういう受け答えができる。作品についてすごく深い会話。コンセプトみたいなところの会話っていうのは、今回私も考えてないし、「どう？うまくいってる？」とかのコミュニケーションが取れてる状態。あと私からすると、さっき言ったみたいに萩さんが作ってる作品から読み取れる唐突で突拍子もなくパーンってつくられた感じとか、色とかも、ここには普通の人だった黄色置いて……青置いて……いやいや！ここは青かな……って考えるのが、多分あんまり考えて置いてない、あちこちにアンバランスで手の跡がついてるっていうので向こうはそんなん感じ[illegible]っていう感じで。コミュニケーションを、そういう意味で作品を通して取りにいこうとしてる[illegible]から、あっちがお面なら私もお面でいこうと思って。だから萩さんが手の跡ととかパーンとつけられるような空間を作品の中に残しとこうと思って、だけど私も負けてられないから、自分の分野の陶磁器を焼かないで粘土でちゃんと張り付くように工夫してあそこに付けた。あれだと上から紙貼ってもなんとなく下に粘土が貼ってあるのがわかるから。っていうので、会話しよう。でも、ちょっと喧嘩しようかな。だから、一応ね言葉でも少し通じるし向こうが私のことをどう思っているかはわかんないけど、名前も覚えてもらってるし、顔も覚えてくれているから、作品と顔を見て、そういうのでやれたら今回はいいかな。



~京芸にたんぽぽのメンバーさんがいらっしゃった時はどのように過ごされましたか？

私は、「萩さん何したい？したいことしよう。」って声かけて、あの時萩さん散歩してたんだよねだから散歩してるのを後ろからついて行ってたりしてた。中央棟のところで変なものを見つけて、覗いてたりしてた。それをテクテク歩いてついて行って、最終的に陶磁器棟に戻ってきて粘土遊びしてる鮎川さんたちのところに合流したんだけど、あの日は萩さん座ったり歩いたりとかね、モニャモニャしてることが多かった。なんか作るってい言ったら画材を私の中でたくさん考えて用意しておいたんだけど、したいことをしてもらおうかなと思ったら、散歩って感じだった。散歩でもいいんじゃないかな。って、お日さんもすごく照ってるし、今日は散歩しよっか！みたいな。

~いろんな用意はしたけれど……

そうそう。そんなことってあるもんね。色々やったけど、そんなに用意しなくても良かったんだって。まずは、かしこまって色々準備したけど、なんか色々自分の好きなようにしてもらって、環境とか私とか今からやっていくこととかに、順染んでもらう方がいいかなと思って。無理やり何かワークショップみたいなことをしなくていいかなとも思ったよね。逆に私が前たんぽぽに行った時に、萩さんと隣同士で鬼の鈴のやつ陶芸室にあったでしょ。私はあれをひたすら楽しんで塗ってたんだけど。

~萩原さんも一緒にやってたんですね。

あれって結構きっちり塗られてるじゃないですか。ああいう塗り方も萩原さんできるんですね。できるできる。他の方に比べると萩さん結構きっちりしてるから、逆に「そこ。もうちょっと跡ついとんで。」みたいな。他の子がべたっと塗ってる感じだけど、萩さんは「丁寧にやらなあかんで。」みたいな。アシスタントみたいな感じ。あそこの陶磁器棟の。ちゃんと自分のポジションをこなしてましたよ。

~1回萩さんから来て、万葉さんが送り返してっていう状態ですか？

うん。今待ってる。けどもう1回送ろうかなとか思ってたり。それもありかなって。

~送るとしたらどんなものですか？

粘土って言ったらここにいっぱいサンプルがあるから、これで何かを作るとは思う。私の中で1個外さない状態で、私の場合はこれに泥塗ったから、それでお面っていうものが来たから、どこかに共通のものを置いた状態でラリーしていこうかなっていうものがあったから。お面って面白くて工芸とちょっと似ていて、使える飾れるやんか。そういうところでも似ているところがあるし、お面って祭

事というか祭り事で使われることとかもあるから。アフリカとかでお面のところって泥を顔に塗る文化のところもあるやん。だけん、そういうところもミックスしようと思って、今度送るときも泥使うやろうなーとは思ってる。……泥団子いれとこっかな。泥じゃなくても、焼成しても何か粘土の素材感を感じるものがいいな……砂とか。砂みたいな作品。焼いてるけど砂みたいな、素材を感じる何かを送りつけようかな。向こうにも何か想像してもらったりとか、こうあんまりさ作品完成！って感じのを送ると……私が逆にそういうの送られて来たらね手のつけようがないんだよね。多分萩さんはこれで喧嘩売ったんねんって感じで来てると思うけど、私それにペチョって泥塗っちゃったからね。多分そんなのが来ても大丈夫だと思うんだけどね、いろんなことを思わせるね、ちょっと抜きどころのある作品の方がやっぱり見やすいね。やっぱり完璧な作品が来たら、胸がこう痛くなる。ちょっとぐらいなんかこう……テヘッていう。なんだろう……今回は作品作るのに馬鹿になろうって思ってるんだよなー。

–これはどこまでが萩さんがやって、どこからが万葉さんがやったんですか？

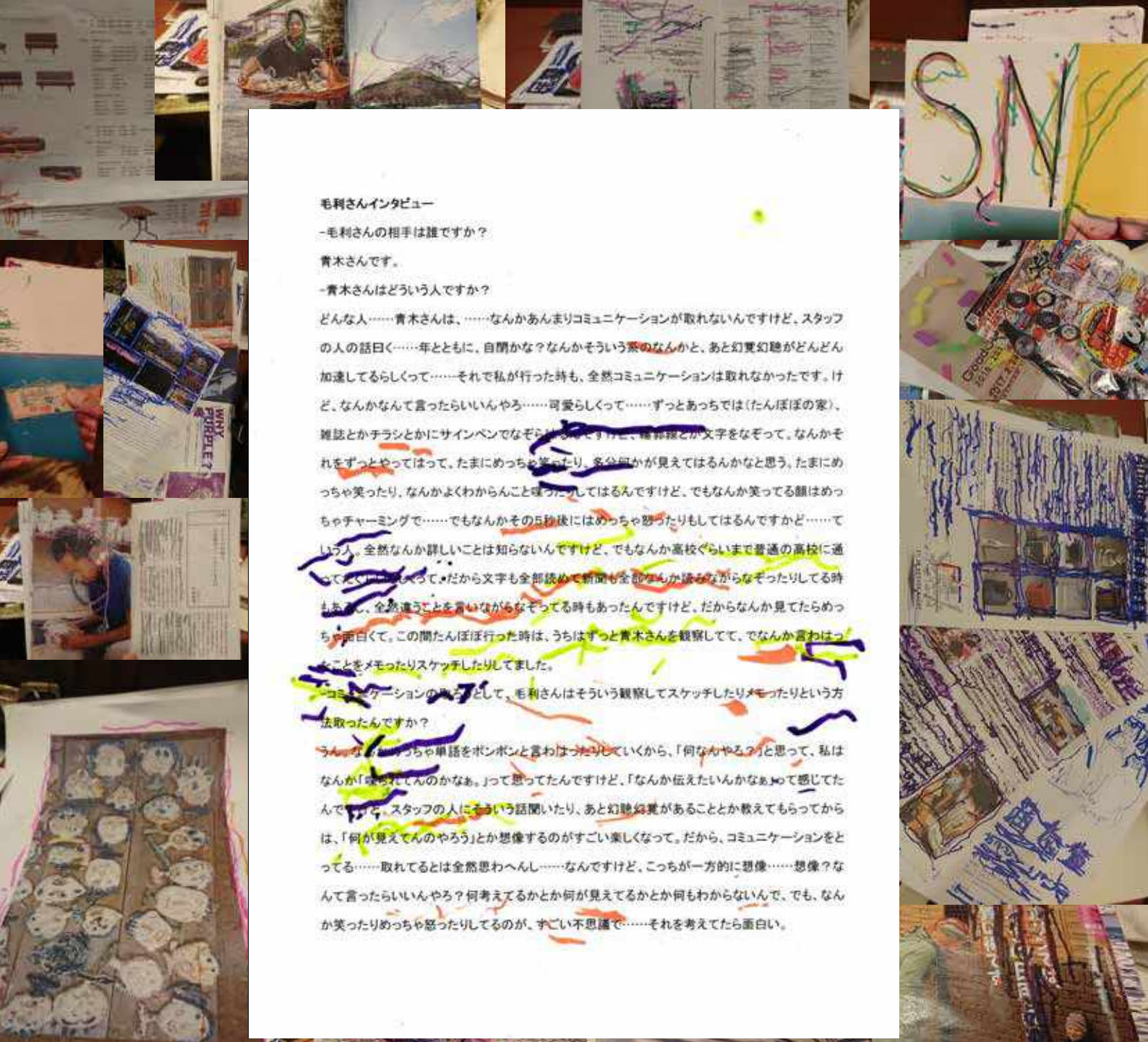
萩さんね、お面とそのアクリル絵の具で塗ったところまでなんだよ。そこから上の泥を塗ってるのと、そこらへんから萩まくって来た木の皮をつけたのが私なんだよ。最初これくらいのサイズでブチブチに巻かれてやって来たんだけど、すごく大きい作品作るって言ってたけど、本当に180センチくらいの作品になっちゃった。展示するときも壁から引っ張ってこう吊るすから。

–天井からじゃなくて、壁から？

うん。壁からこれを伸ばして、少し斜めの展示台作ると思う。こういうタイプの。

–じゃあ、お面がいっぱい並ぶみたいな展示になりそうですか？

そうだね。それでもいいかなと思って。顔がいっぱいあるって。なんかコミュニケーションしてるから、お面がコミュニケーションしたらいいかな。



毛利さんインタビュー

-毛利さんの相手は誰ですか？

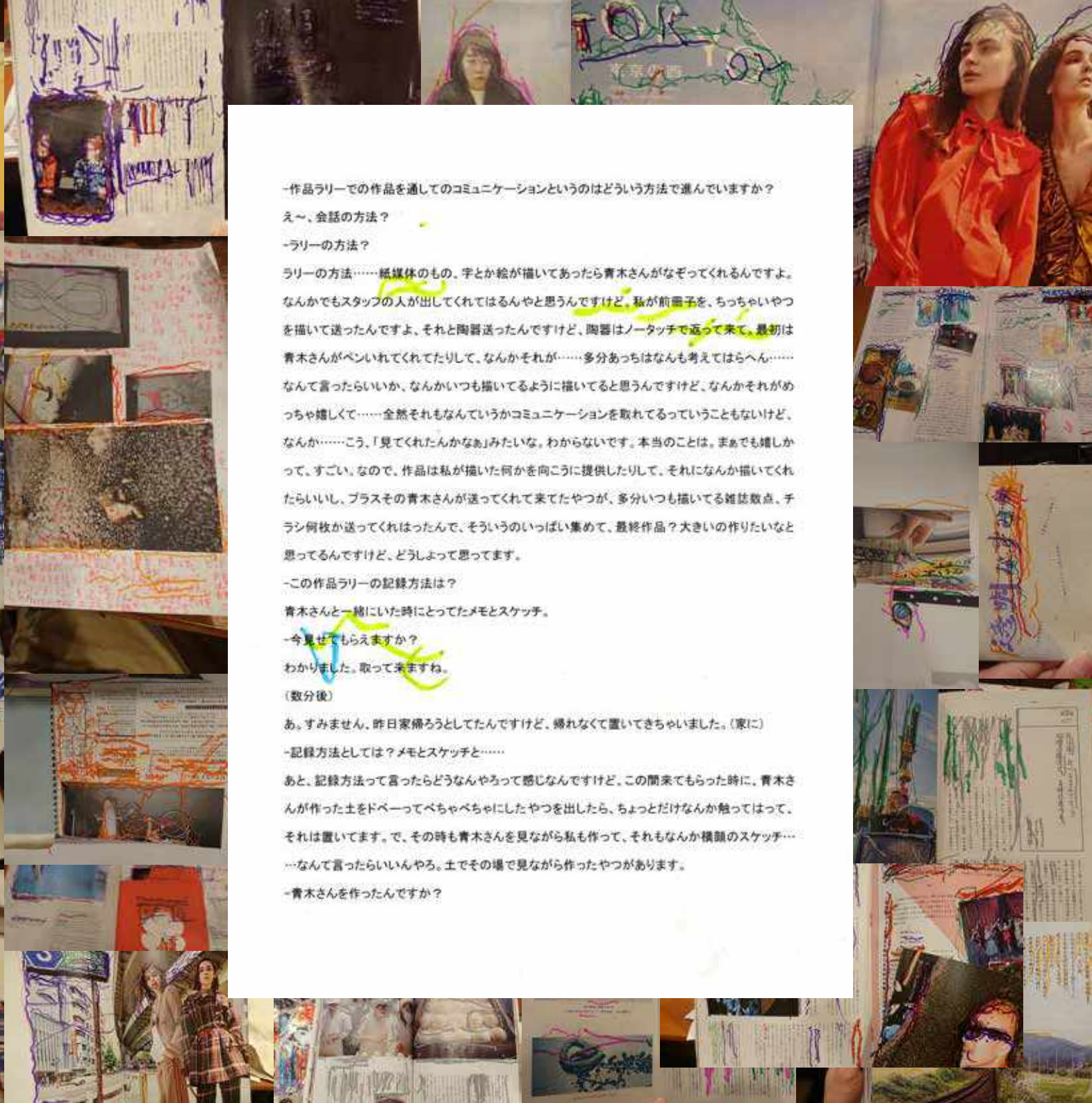
青木さんです。

-青木さんはどういう人ですか？

どんな人……青木さんは、……なんかあんまりコミュニケーションが取れないんですけど、スタッフの人の話曰く……年とともに、自閉かな？なんかそういう系のなんかと、あと幻覚幻聴がどんどん加速してるらしくって……それで私が行った時も、全然コミュニケーションは取れなかったです。けど、なんかなんて言ったらいいんやろ……可愛らしくって……ずっとあっちでは（たんぽぽの家）、雑誌とかチラシとかにサインペンでなぞってるんですけど、線路線とか文字をなぞって。なんかそれをずっとやってはって、たまにめっちゃ笑ったり、多分何かが見えてはるんかなと思う。たまにめっちゃ笑ったり、なんかよくわからんこと喋ったりしてはるんですけど、でもなんか笑ってる顔はめっちゃチャーミングで……でもなんかその5秒後にはめっちゃ怒ったりもしてはるんですかど……ていう人。全然なんか詳しいことは知らないんですけど、でもなんか高校ぐらいまで普通の高校に通ってたくらいは知ってて。だから文字も全部読めて新聞も全部なんか読みながらなぞったりしてる時もあるし、全然違うことを言いながらなぞってる時もあったんですけど、だからなんか見てたらめっちゃ面白くて。この間たんぽぽ行った時は、うちはずっと青木さんを観察してて。でなんか言わはったことをメモったりスケッチしたりしてました。

-コミュニケーションの取り方として、毛利さんはそういう観察してスケッチしたりメモったりという方法取ったんですか？

うん。なんかめっちゃ単語をポンポンと言わはったりしていくから、「何なんやろ？」と思って、私はなんか「騙されてんのかなぁ。」って思ってたんですけど、「なんか伝えたいんかなぁ。」って感じてたんですけど、スタッフの人にそういう話聞いたり、あと幻聴幻覚があることとか教えてもらってからは、「何が見えてんのやろう」とか想像するのがすごい楽しくなって。だから、コミュニケーションをとってる……取れてるとは全然思わへんし……なんですけど、こっちが一方的に想像……想像？なんて言ったらいいんやろ？何考えてるかとか何が見えてるかとか何もわからないんで、でも、なんか笑ったりめっちゃ怒ったりしてるのが、すごい不思議で……それを考えてたら面白い。



-作品ラリーでの作品を通してのコミュニケーションというのはどういう方法で進んでいますか？

え～、会話の方法？

-ラリーの方法？

ラリーの方法……紙媒体のもの。字とか絵が描いてあったら青木さんがなぞってくれるんですよ。なんかでもスタッフの人が出してくれてはるんやと思うんですけど。私が前面子を、ちっちゃいやつを描いて送ったんですよ、それと陶器送ったんですけど、陶器はノータッチで返って来て。最初は青木さんがペンいれてくれてたりして、なんかそれが……多分あっちはなんも考えてはらへん……なんて言ったらいいか、なんかいつも描いてるように描いてると思うんですけど、なんかそれがめっちゃ嬉しくて……全然それもなんていうかコミュニケーションを取れてるっていうこともないけど、なんか……こう、「見てくれたんかなぁ」みたいな。わからないです。本当のことは。まぁでも嬉しかって、すごい。なので、作品は私が描いた何かを向こうに提供したりして、それになんか描いてくれたらいいし、プラスその青木さんが送ってくれて来てたやつが、多分いつも描いてる雑誌数点、チラシ何枚か送ってくれはったんで、そういうのいっぱい集めて、最終作品？大きいの作りたいなと思ってるんですけど、どうしよって思ってます。

-この作品ラリーの記録方法は？

青木さんと一緒にいた時にとってたメモとスケッチ。

-今見せてもらえますか？

わかりました。取って来ますね。

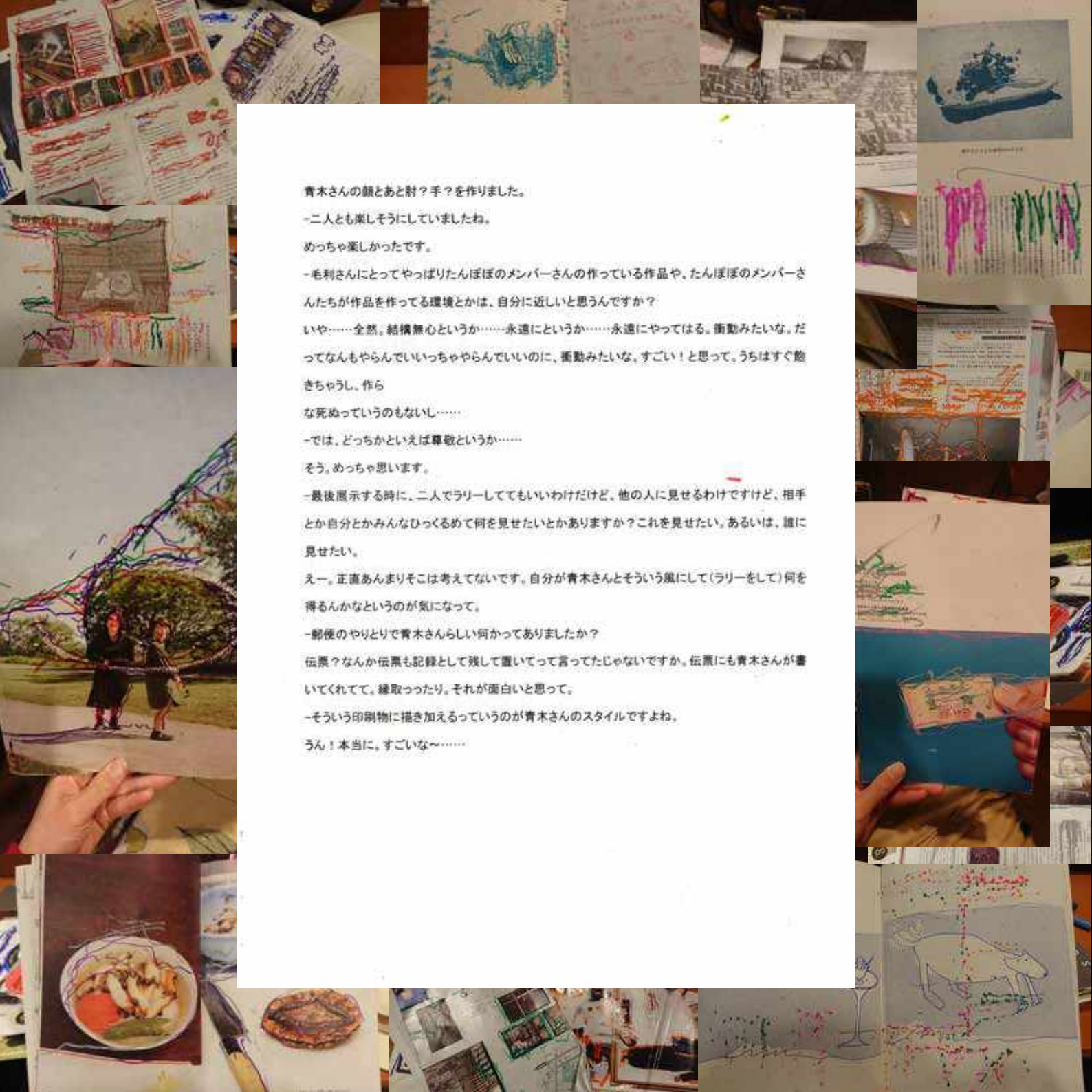
（数分後）

あ。すみません。昨日家帰ろうとしてたんですけど、帰れなくて置いてきちゃいました。（家に）

-記録方法としては？メモとスケッチと……

あと、記録方法って言ったらどうなんやろって感じなんですけど。この間来てもらった時に、青木さんが作った土をドベーってべちゃべちゃにしたやつを出したら、ちょっとだけなんか触ってはって、それは置いてます。で、その時も青木さんを見ながら私も作って、それもなんか横顔のスケッチ……なんて言ったらいいんやろ。土でその場で見ながら作ったやつがあります。

-青木さんを作ったんですか？



青木さんの顔とあと肘？手？を作りました。

–二人とも楽しそうにしていましたね。

めっちゃ楽しかったです。

–毛利さんにとってやっぱりたんぽぽのメンバーさんの作っている作品や、たんぽぽのメンバーさんたちが作品を作ってる環境とかは、自分に近しいと思うんですか？

いや……全然。結構無心というか……永遠にというか……永遠にやってはる。衝動みたいな。だってなんもやらんでいいっちゃやらんでいいのに、衝動みたいな。すごい！と思って。うちはすぐ飽きちゃうし、作ら

な死ぬっていうのもないし……

–では、どっちかといえば尊敬というか……

そう。めっちゃ思います。

–最後展示する時に、二人でラリーしててもいいわけだけど、他の人に見せるわけですけど、相手とか自分とかみんなひっくるめて何を見せたいとかありますか？これを見せたい。あるいは、誰に見せたい。

えー。正直あんまりそこは考えてないです。自分が青木さんとそういう風にして（ラリーをして）何を得るんかなというのが気になって。

–郵便のやりとりで青木さんらしい何かってありましたか？

伝票？なんか伝票も記録として残して置いてって言ってたじゃないですか。伝票にも青木さんが書いてくれてて。縫取っったり。それが面白いと思って。

–そういう印刷物に描き加えるっていうのが青木さんのスタイルですよね。

うん！本当に。すごいな〜……

鮎川さんインタビュー

-これ全部なんの動物ですか？

これは全部ヤギで。前に来てた（学校に）ヤギが 3 週間くらい来てて、世話してたんですよ。4 匹ともその時のヤギ。

-今はヤギブームなんですか？

いや、今は……もともと好きってわけでもなくて。でも、フォルムは結構興味があって。行動とかもヤギってすごい何を考えているかわかんないっていう。なんかネットで調べたらそういう感じらしくて。こいつもそういう感じで。結構ヤバイ感じで……人を 2 週間くらいしたらすごい舐め始めて。めっちゃどついて来たりとか、何もいうことを聞かない状態になって。なんかめちゃめちゃ好きで作ったというより、こんなやついたよみたいな感じで作った。

-いろんなヤギがいるのはどうしてですか？

これ全部こういう時がありましたっていう記憶で、こういう角度になってたりとかこういう時があったとかで……3 個目は突進して来た時で、4 個目は一人だったら寂しいらしくて、急にどっか行ったらすごい鳴いてて、戻って来て顔見たらすごい駆け寄ってくるけどどついてこけるっていう。これ駆け寄って来てる時の。でもこれはめちゃめちゃバースが狂ってて。斜めに作ってたら、後ろ足が割れちゃったりしてそれを繋げ合わせてたら、なんかめちゃめちゃに。

-鮎川さんのヤギと過ごした時間をめっちゃ感じます。突進してくるヤギめっちゃいいですね！（数分間作品について話し続ける）……そろそろ本題の方に。鮎川さんのペアの方はどの方ですか？

平井さんです。

-今どちらが作品を持ってるんですか？

今は平井さんが持っています。

-何回くらいラリーしたんですか？

2 回目？

-2 回目平井さんに返したんですか？

来て返して、来て返して……あ、4 回。

-どんな感じに作品が変わっていきましたか？

立体が来て、立体を返して。で、絵が来て、でも立体で返しました。

–絵が来たというのは、立体が絵になって来たということですか？

えーっと、立体が最初送られて来て、私も立体を作って返したら、全く別の。なんかすごい流行がコロコロ変わるらしくて、で、後の絵が来て。

じゃあ、その絵を使って立体にしたりしたんですか？

あっ。そう。絵を見て、「背景のキャラクターを掛け合わせて描きました。」みたいなことが書いてて、ウサギとタヌキを掛け合わせて描いてたから、こっちは桃太郎の動物を全部掛け合わせた立体を作って送ってみました。

–何で作ったんですか？

100 均の伸びる粘土っていうすごい使いやすい粘土があって、それで。

–桃太郎のキャラ全部を掛け合わしたって……やばそう。

[illegible]動物たちだけ。

–サルイヌキジ？

–そうです。

–1 つの動物やのに全ての要素が詰め込まれていた、ってことですか？

そんな感じです。で、[illegible]と人っぽくないまんま 2 人で行って作ったので。

–平井さんってどういう人ですか？

平井さんは……どんな方？……あんまりコミュニケーションは。会話のあれはうまくはなくて、こう……平井さんがこっちが[illegible]それを「そうですね。」みたいな感じで聞いてる。……どんな……でもあっちゃ平後とか言ってて、「次は唐揚げを食べる。」みたいなことずっと言ってたりして、結構おもしろい。……可愛い感じの。

–作品を一緒に作ったりしましたか？

作品は一緒には作ってない。どっちも自分の作った作品を[illegible]ってた感じでいる状態。

–それに重ねてなんか作るというかよりは、エッセンスを汲み取ってみたいな

あ。そ[illegible]。……なんでそうやってるかって言われると、なんでかはあんまわからなくて、自然にそうなってて。……「付け加えて返したりしないの？」って寺岡さんに聞かれた時があって。

「あ。確かに。」ってなったけど……なんか加えようって思わなかった。なんでかわからないけど……

−平井さんも

そう。平井さんも。今こんなのやってるよみたいな感じで送って来てくれてる。「ゾウを描きました。」って絵に書いてあったりして。

−展示の方法は？

うーん。なんか全然……どうやったら。……展示方法とか苦手で。展示方法が全然思いつかなくて。結構人に「こうやったらいいんじゃない？」って言われて、「確かに。」ってなっちゃうから。どんな感じでしたらいいか……

−（展示アイディアを伝える。）作品の繋がりが見えるような展示が見てみたいです。

全然繋がりはないけど、私が平井さんの流行に乗っかってるみたいな。そこだけ繋がって。平井さんの１回目の作品と２回目の作品が繋がりがなさそうで

−記録方法は？

送られて来た伝票？と手紙。「こんなの作りました。」って書いてある紙があります。それがとってあります。向こうから来た手紙がとってあって、向こうがとってるかはわかんないけど、毎回なんか文字入れて送っています。

山口さんインタビュー

–ペアの方はどなたですか？

舟木さんです。舟木花さんです。

–今作品はどっちが持ってるんですか？

私が持ってます。えっと…花さんから１回送られて来て、それでまた送られて来て。だから、2 回目のラリーですね。私が今作品持ってる状態です。

–舟木さんはどんな人ですか？

どんな人。どんな人なんでしょう……「なんかすごい可愛い人やなー。」って思いますね。あのー。たんぽぽに行った時とか、机に向かってお花とか描いてたり、自分の気になるモチーフをせっせと描いていたりして、真面目で可愛い人。それでそう、あのー、たんぽぽで舟木さんと一緒にご飯食べたりして一緒に過ごす時間があった時に、率先して手を繋いで連れて行ってくれたりとかありましたね。どんな人……いい人です。ふふふふふ。（二人で微笑む）

–舟木さんとは言葉でのコミュニケーションは取れるんですか？

こちらから聞いたら「はい。」か「いいえ。」で答えてくれる。

–一緒に作品を作ったことはありますか？

あー。一緒に作ったことはないですね。ほんまや。

–一緒に過ごしたり、作品をラリーして気づいた舟木さんの新たな側面はありましたか？

あー。今これが好きなんやなーっていう。前一番最初に送られて来たのが……ダンボールの中に何かが入っていた。えーっと。……

–アイロンビーズ？

アイロンビーズは 2 回目なんですけど。一番最初……紫色。そう！自分で色を塗ったダンボールの中に……何が入っていたっだ……何か違うものが入っていて、それで送り返した時に……それー……その送り返したものにまた自分が今……そう。その時にめちゃくちゃアイロンビーズにハマってるんだなと思って。一番最初とはまた違ったものを送りつけてくるという。

–一番最初に送って来たものはもうなくて、新しく返って来たという。

あ。いや、それに新しくブームになったアイロンビーズがくっつけられてきて、それと一緒にアイロン

ビーズのカケラみたいな。6 角形やら……いろんな形のものを送って来てくれて。今度どんなブームを発症させて返ってくるのかが楽しみです。

-アイロンビーズなどに対してどのようなアプローチをしましたか？

私自身も割とこういう路線でいくというのがなくて、私自身も結構ブームみたいなものがあるんですよね。だから、ブームとブームを送りあってる感じです。

-ブームトブームを送り合う……ブーム合戦

ふふふ。そうですね。

-どんなブームがあるんですか？

今は針金ブームと画用紙ブームがあって。

-なんで針金に惹かれたんですか？

あの―……なんか 2 回生の時から、なんでしょう……香川にいた時の嫌な記憶が蘇って来て……それでどうしようもないのに、どうしても考え込んでしまって。何もできなくなってしまって、ただこのどうしようもない気持ちをどうにかしたいってなって、やるせない気持ちを……ただ手でぐるぐるするだけで形が仕上がっていくんで、それだけでこの自分の鬱々とした気持ちを解消できている気がして、それを持っていうならこれをもっと違う形にできたらいいなって思いながらやっていて、こういう風になっていったんです。でも、針金以外でもできそうやなって思って、今画用紙に丸を永遠に描いていったりしています。そういったやるせない気持ちが制作の中心にだんだんなっていってるんじゃないかという気がしています。

-制作の動機がそういったやるせなさからきてるんですね。

あ、あと、この石木彫でたくさん木の粉を浴びて来たので、ちょっと汚いと思います。座るのはよした方がいいです。

-あ！座る前に親切にありがとうございます。座ろうと思っていました。

私さっきそこにカバン置いたんですけど、そこが白くなって。さっき落としたんですけど、なかなか取れなくて落としきれないんで。ふふふふふ。（二人で微笑み合う）

-花さんは制作の動機はどのようなところからきていると思いますか？

どういうところからきてるんですかね。

-お互いブームがあったりとか、聞いてたら結構似てる感じとかあるのかなと思ったんですけど。

花さんの作りたい動機は何なんでしょう……何か自分の周りにあるものを描き写したりとか、それを素材にしてたりとかしてるんですよね。なんかある時は階段に何かをたくさん貼り付けてたりとか。結構綺麗だったんですけど、何を貼り付けてたんだろうか……吉永さんが見せてくれたんですけど。

-前たんぽぽに行った時に、吉永さんが花ちゃんが山口さんから譲いた作品に手を加えているとことか作品を開封しているところの動画を見せてもらったんですけど、紫の箱にすぐに黄緑の絵の具を勢いよく塗ってはって、「これや。」っていう何かインスピレーションが湧いたんかなって……

それか、気に入らなくてすぐに黄緑に塗ったのかもしれないですね。「これじゃない！」って。ははははは。（二人で笑い合う）

-最初に作品来た時どう思いましたか？

あー、何か思い出しそう。えーっと、送られて来て送った時返したやつは、紫色の箱が一番最初に送られて来て……もしかしたら、紫色の箱だけだったかもしれない。中身はなかったかもしれない。えーっと、それで中に何を入れようかなと思って、紫色の箱を小鳥のカゴみたいにして、小鳥を針金で作って送ったんですけど、それの土台となる紫の箱を模したものを作って送りました。

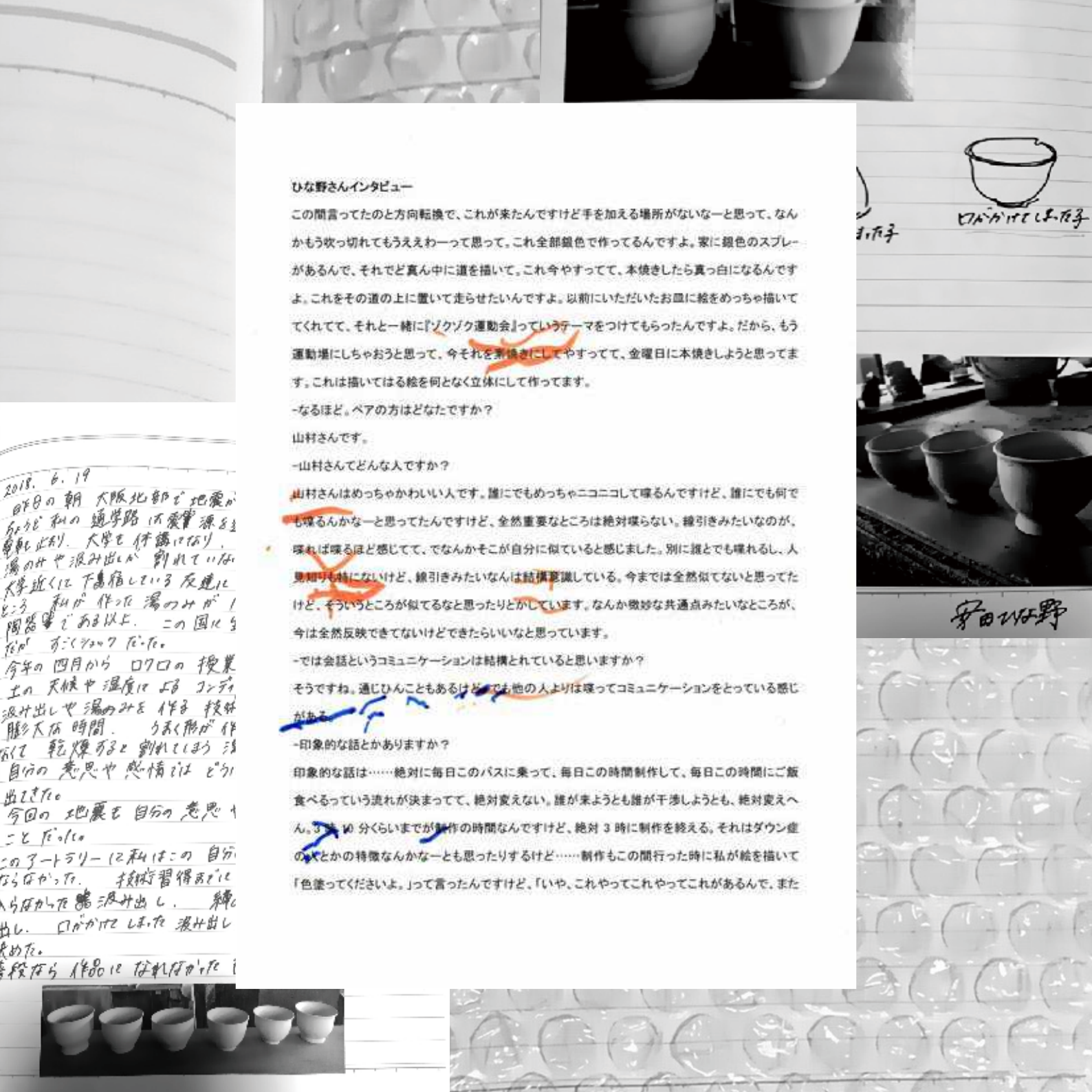
-展示ってどういう感じが自分たちに一番あってると思いますか？

前にたんぽぽの展示でしたやつが割と好きで、丸い台が島みたいに点在している感じ。あれがなんか可愛くて。

-いろんなブームが二人の中であって、一個のことを追求していくというよりは、一個一個が飛び石に二人が飛び移っていくみたいにあそんでるみたいな。

-今回のラリーで、前回のラリーとは違うところはどのような点ですか？

前回は手紙を送りあってる感じだったので、コミュニケーションをとってる感じでした。今回は作品を送りあっているので、ブームとブームの送り合いで「私はこうだ！」「あぁ。そう。じゃあ私はこっち！」みたいな感じで。好きなものを押し付けあってる感じはありますね。これがいいのかどうかはわからないんですけど。



ひな野さんインタビュー

この間言ってたのと方向転換で、これが来たんですけど手を加える場所がないなーと思って、なんかもう吹っ切れてもうええわーって思って。これ全部銀色で作ってるんですよ。家に銀色のスプレーがあるんで、それでど真ん中に道を描いて。これ今やすってて、本焼きしたら真っ白になるんですよ。これをその道の上に置いて走らせたいんですよ。以前にいただいたお皿に絵をめっちゃ描いててくれてて、それと一緒に『ゾクゾク運動会』っていうテーマをつけてもらったんですよ。だから、もう運動場にしちゃおうと思って、今それを素焼きにしてやすってて、金曜日に本焼きしようと思ってます。これは描いてはる絵を何となく立体にして作ってます。

-なるほど。ペアの方はどなたですか？

山村さんです。

-山村さんてどんな人ですか？

山村さんはめっちゃかわいい人です。誰にでもめっちゃニコニコして喋るんですけど、誰にでも何でも喋るんかなーと思ってたんですけど、全然重要なところは絶対喋らない。線引きみたいなのが、喋れば喋るほど感じてて、でなんかそこが自分に似ていると感じました。別に誰とでも喋れるし、人見知りも特にないけど、線引きみたいなんは結構意識している。今までは全然似てないと思ってたけど、そういうところが似てるなと思ったりとかしています。なんか微妙な共通点みたいなところが、今は全然反映できてないけどできたらいいなと思っています。

-では会話というコミュニケーションは結構とれていると思いますか？

そうですね。通じひんこともあるけど、でも他の人よりは喋ってコミュニケーションをとっている感じがある。

-印象的な話とかありますか？

印象的な話は……絶対に毎日このバスに乗って、毎日この時間制作して、毎日この時間にご飯食べるっていう流れが決まってて、絶対変えない。誰が来ようとも誰が干渉しようとも、絶対変えへん。3時 10 分くらいまでが制作の時間なんですけど、絶対 3 時に制作を終える。それはダウン症のひとかの特徴なんかなーとも思ったりするけど……制作もこの間行った時に私が絵を描いて「色塗ってくださいよ。」って言ったんですけど、「いや、これやってこれやってこれがあるんで、また

3月ぐらいで。」来年の3月ねって言われたんでめっちゃ先やんって。（笑）順番を絶対に変えない。芯めっちゃ通ってんなーって思いました。

–ラリーはどんな感じで進んでますか？

記録媒体としては交換ノートをしてて、最初に私が1個目の作品を作った時に思ったこととか感じたことを書いて送ったら、返ってきたのが「今日のご飯は○○です。」みたいな意味のわからんことが返ってきて……あんまり会話になってないけど交換ノートをやってて。郵便のアレをとりあえず置いてる感じです。で、私から送って、山村さんからきて。今作ってるみたいな感じです。

–交換ノートの方が会って喋っている時より、会話が噛み合わないんですか？

交換ノートよりはとれてるかな……

–展示方法は何か考えてますか？

これ（皿）が今6つあるんですけど、焼かずにエポキシで全部積み重ねて繋ごうかなと思ってます。だから展示はこのオブジェと平面の二点で今は考えています。

–ラリーはどうですか？やりにくいとかありますか？

やりにくいの感情は一番最初にあったんですけど、今は「もうええわ。」っていう諦めの境地ですね。最初に手を加えられへんほどヤバイのがきたから、「えー、どうしよー。」ってなった。山村さんが作家としてできあがっているからそこに手を出すのがめっちゃ怖い。でも、せっかくのラリーやし……（少し自分の意甘つくっている作品の話をする）結構普段つくるのが、無彩色というよりは山村さんのようなカラフルな作品の方が好きで、こういうのとかアクセサリーとかをつくっています。

–普段はアクセサリーつくられてるんですね。

そうなんです。こういうとか……結構色彩の豊かな方が好きで、ちょっと似てるかなー（山村さんと）って思いました。

–作品をつくってる過程とか展示で見せられたら面白いかなと思いました。全然噛み合っていない交換ノートとかもコミュニケーションが言葉以外で行われていることの証明になるんじゃないかなって。今、どっちが交換ノートを持ってるいんですか？

山村さんです。私がノートを書いてた時が、ちょうど地震があった時であんまり今まで地震経験したことなかったし、陶器始めてから初めての地震で作品がめっちゃ割れて。それで何考えてたか

は忘れたんですけど、結構重めの内容を書いたんですけど、すっごい軽い内容が来てちゃんと読んでんのかなーって思いましたね。

福島さんのインタビューは音声が不明瞭のため、ペアの水田さんのインタビューを掲載。福島さんは実際に水田さんと会って二人で制作すると、とてもスムーズに楽しく制作が進むのに、ラリーになると返信が返ってこないことに悩んでいた。

水田さんインタビュー

-福島くんのことを覚えていますか？

はい！

-福島くんとどんな話をしましたか？

どんな話……

-とても楽しそうに二人で制作されていましたよね？

はい！そうですね。普通の会話をしながら、制作をしました。

-木の角柱を使って制作されてたんですか？

はい。あの時（たんぽぽのメンバーさんが京芸に遊びに来た時）は、そうですね。

-今福島くんから来た作品はありますか？

今はないです。

ーあれ？

今は向こうです。

-（吉永さん）今こっちで作業しているのは、鮎川さんと平井さんのペアぐらい。

-え。そうなんですか？福島くんが「返ってこない。」って言ってたんですけど……

-（吉永さん）あれ。送ったよ。

はい。

-（吉永さん）だいぶ前に

はい。

-ずっと返ってこないって言ってはったんですけど。

（水田さんの疑う声）

−（吉永さん）送った送った！

僕は送ったと思う。僕は。……吉永さアーーーーーん！！

−アーーーー！！

送ってなかった！（叫び声）

−（吉永さん）本当にごめん！

何をやってるんですか？！

−（吉永さん）ごめん、ほんまや！

吉永さーん！！

−（吉永さん）ごめん、手紙まで書いてもらってたのに。ごめん。俺のせいやわ。

今日永守さんに渡すわ。ごめん、水田くんまじでごめん。

（みんな終始笑っている）

−（吉永さん）ごめん、水田くん。俺の責任やわ。ごめん！水田くん。

むふふふふ

−（吉永さん）すみません。僕でした。大変申し訳ありません。ごめん。水田くん。ふふふふふ。僕も

何回も聞かなくて。すみま……

−（吉永さん）いやいやいや、ごめんな。ずっとここに入れてたわ。よかった今日取材に来てくれて。

危なかった。今日永守さんに渡すわ。

はい。お願いします。ここに「だいぶお待たせしました。」って

−（吉永さん）俺が書く。今すぐ書くわ。

（みんな終始笑っている）

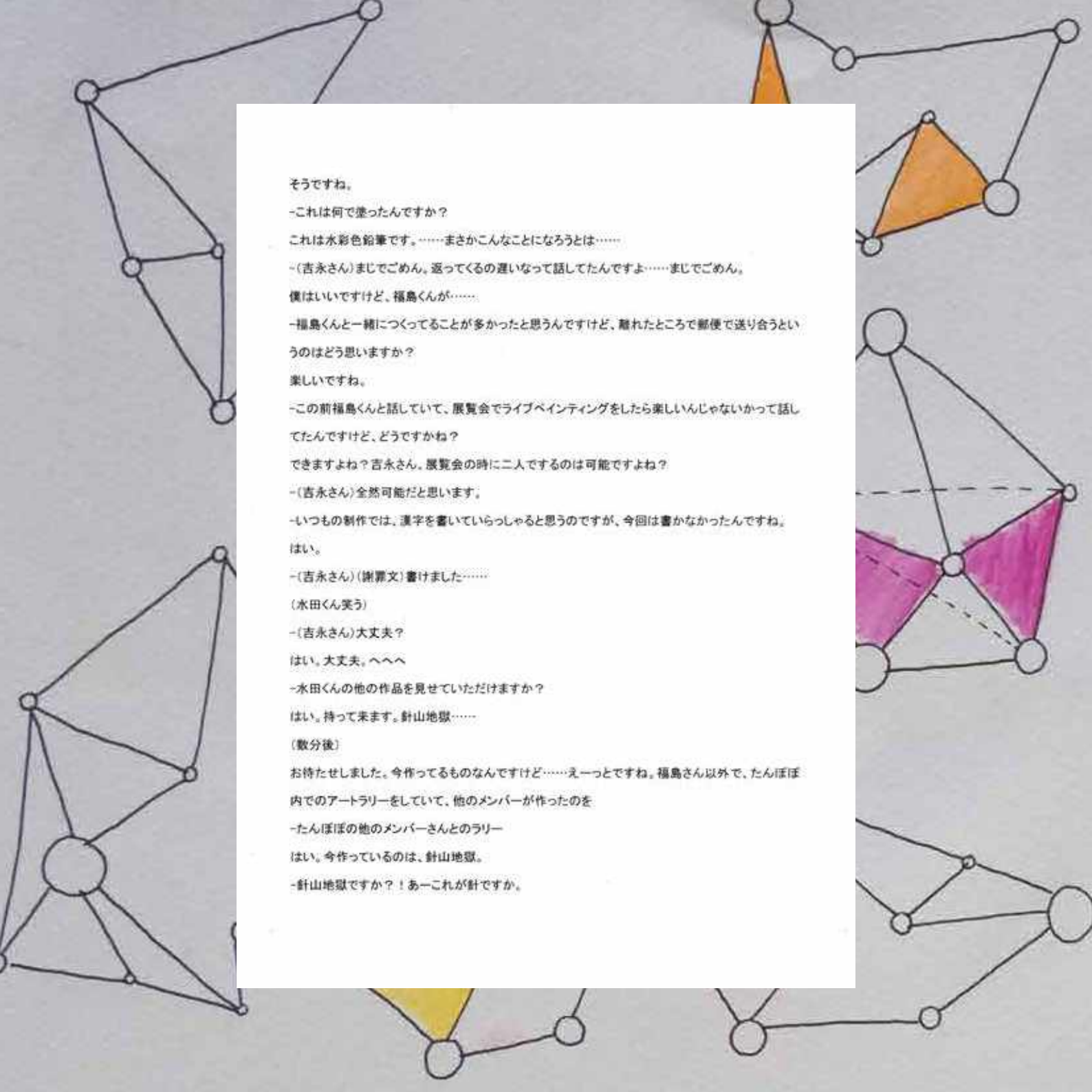
−どんな作品を送ったんですか？

福島さんの作品に、色を塗りました。こんな感じなんですよ。

−見ていいですか？

はい。いいですよ。

−アイディア帳みたいな。



そうですね。

-これは何で塗ったんですか？

これは水彩色鉛筆です。……まさかこんなことになろうとは……

-（吉永さん）まじでごめん。返ってくるの遅いなって話してたんですよ……まじでごめん。

僕はいいですけど、福島くんが……

-福島くんと一緒につくってることが多かったと思うんですけど、離れたところで郵便で送り合うというのはどう思いますか？

楽しいですね。

-この前福島くんと話していて、展覧会でライブペインティングをしたら楽しいんじゃないかって話してたんですけど、どうですかね？

できますよね？吉永さん。展覧会の時に二人でするのは可能ですよね？

-（吉永さん）全然可能だと思います。

-いつもの制作では、漢字を書いていらっしゃると思うのですが、今回は書かなかったんですね。

はい。

-（吉永さん）（謝罪文）書けました……

（水田くん笑う）

-（吉永さん）大丈夫？

はい。大丈夫。へへへ

-水田くんの他の作品を見せていただけますか？

はい。持って来ます。針山地獄……

（数分後）

お待たせしました。今作ってるものなんですけど……えーっとですね。福島さん以外で、たんぽぽ内でのアートラリーをしていて、他のメンバーが作ったのを

-たんぽぽの他のメンバーさんとのラリー

はい。今作っているのは、針山地獄。

-針山地獄ですか？！あーこれが針ですか。

ここをこうやって、今こうやっています。

–へー。なんで針山地獄なんですか？

えーとですね。僕の前のメンバーが、……鬼を……

–作っている？

鬼を作っていたから。鬼といえば、

–なるほど。なんでもやらはるんですね。立体もやるし、漢字も書くし、色も塗るし……これもボンドで塗っていくんですか？

はい。ボンドか、ガムテープで悩んでいます。

–福島さんと展覧会で何かつくるってなったら、何が作りたいですか？

えーっとですね。僕は基本的に福島さんに合わせますが、合わせますが……できれば、できれば立体物とかがいいんですけど。

–材料とか使ってみたいものはありますか？

材料は……テープを、テープを固めて、何かヘンテコなものをつくったりしたいですね。

「オープンキッチン」回想

「オープンキッチン」は、たんぽぽの家のメンバーと京都市立芸術大学の学生が制作物を交換する試みとしてはじまった。ものを作って段ボールにつめて送り、相手はそれを開封して手を加え、あるいは新たに何かを作り、段ボールにつめて送り返す。こちら、大学の側からするとこのやりとりはそれほど難しくなかった。どんなものを送りつけても返してくれる信頼が、たんぽぽの家のメンバーや、スタッフの人々に対してはじめからあった。その意味では、交換の試みとはいえ、よく整備された水平面がこちらに向かって開かれており、あとは向こうに飛びこむだけでよかった。(たんぽぽの家には、文字どおり「もろ手をあげて」歓迎してくれるメンバーもいる)

だから、学生がものを取り交わすだけでなく、外に向かって展示するという方針を立てたとき、それは事態をもう少し複雑にする工夫なのだろうと思った。交換の水平面に、目をこらしていくらかのデコボコを見つけるか、あわよくば別の次元をさしはさもうとしたのではないだろうか。

もう一年が経つが、展示としての「オープンキッチン」をそんな挑戦として思い出す。

——

寺岡波瑠さんは展示空間を構想してくれた。寺岡さんは崇仁のギャラリーをなかば分割して、一方には交換過程の記録を、もう一方には交換の成果物を展示することにした。「なかば」というのは、展示空間を区切るのが半透明の、風を受けるとゆらゆらするヴェイルだったから。ギャラリーに入ると、スケッチ、写真、日記、ノートのきれぎれが天井から吊るされている。郵送のために使われた段ボールが置いてあって、作家インタビューの音声記録をそれに腰かけて聞いてもいい。剥き出しの壁面にはキュレーターの河原雪花さん、小林奏子さんによる詩的な言葉が記されているが、ところどころが欠けて、剥落した文字が床に散らばっている。それらを踏み、小さな階段をのぼり、おりて、ヴェイルをもちあげる。そうしてはじめて、「オープンキッチン」に参加した六つのペア、みんなで十二人の作品を見ることができる。

垂直の広がりとして思い出される、あの展示空間には、交換の過程をひとたびバラバラにして、じっくり点検しようとする寺岡さんの冷めた手つきがあったと思う。

——

展示されたものはどうだったろうか。

青木克考さんと毛利愛実子さんの作品、というか領域は、誰でもふらっと立ち寄りたくなる愛らしさだった。それでいて、入りこんでしまえばたくさん刺激があって、つい長居したくなる。

青木さんはノートの文字列をなぞり、雑誌の写真をふちどる。ものの輪郭をなぞるだけではなくて、強くもなければ弱くもない、這うような線が見るものをゆったりとした時間に巻きこむ力を持っている。毛利さんは青木さんのそのリズムを受けとめて、素材を送り、送り返されてきたものを集め、綴じ、ときには新しいかたちを与えて共同制作を進めていった。展示のなかには、青木さんの描画が二つ、一つはじゃがいも、もう一つはきゅうりみたいな形に丸められたものもあった。二つはワイヤーで繋がれ、やじろべえのように平衡をとっている。

展示中には、ビニールシートに風景を透かせて、その輪郭を青木さんに描きとってもらうパフォーマンスもあった。ためらってみたり、かと思えば一転して大胆な描きっぷりの青木さんにダンディズムを感じたことを覚えている。

——

同じように、展示中にライブパフォーマンスをおこなったのが水田篤紀さんと福島周平さんのペアだった。同世代の二人は、仲も良さそうだったが、表現をめぐる関心も共有していたのかもしれない。水田さんは絵を描き、ダンスをして、電子デバイスを用いた演奏もする(ようは、なんでもする)。福島さんは大学では彫刻を専攻しているが、彫刻の技法とデジタルな表現の重なりや、ズレに関心を抱いているようでもあった(聞いたわけではないが、たぶん)。二人とも、自分の選びとった方法や、表現の媒体について知的な自覚があるように見えた。

パフォーマンスはそんな二人にふさわしいやり方だった。大きなカンバスにペインティングをするのだが、伸び伸びと手を動かすだけではない。養生テープを縦横に貼りつけて、その上に線を引いたのち、テープを剥がしてまた線を重ねる。この手続きを繰り返すことが水田さんから提案されたらしい。水田さんは、経験に支えられているのか、ためらいなく多層的な画面をつくってゆく。福島さんはときおり思案しつつ、遅れまいといった表情でそれに応じる。

二人はドローイング作品を交換してきたから、お互いの発想や、手の動きをよく知っているのだろう。太さの均一ではない線が協働して、半導体基板のように複雑な紋様が現れた。

——

これまで振り返った二つのペアの作品は、柔らかい親和の印象を与えるものだった。対して、萩原宏一郎さんと平田万葉さんの作品はカチッと硬質の手応えのあるものとして思い出される。

平田さんは、萩原さんのつくるお面の力に打たれて共同制作に踏み出した。送られてきたお面には人の目を引く輪郭の歪み、点描の強さだけでなく、「遊び心」や「おかしみ」もあって、それが平田さんを惹きつけた。交換するなら、それは勝負だ、とも平田さんは言っていた。このお面がたえず自分を刺激してくるなら、自分も

また相手を突っつき、刺激を与え返さなければならない。彼女は自室の一角にお面をひっかけて、そんなことを考えていたらしかった。

一方で、萩原さんは作品についてはあまり語らなかったが、何かをお面に重ねるのではなく、異なる素材を添えるように、あるいは組み合わせるようにして送り返してくる自分のペアには満足げだった。「平田さん、何でも知ってはる」。展示された作品のなかには、大胆に空白を残したままに展示されたものもあったが、その意図を尋ねると「違うこともしてみたかった」とのこと。いいものだから、この展示を子供たちに見てほしいとも言った。

――

「オープンキッチン」が、いつも対等な関係で結ばれていたとは思わない。安田ひな野さんと山村晃弘さんのペアの場合、少なくとも制作のキャリアにおいて大きな差があった。山村さんは毎日のルーティンのなかで微細な発展を繰り返しつつ、長年にわたって絵画の制作に取り組んできた。作品のリストを昔のものからめくってみると、かつて埋め尽くされていた背景にわずかずつ余白が広がり、それが奥行きとなって生まれた空間のなかを、動物のようにも、小細胞のようにも見えるカラフルな模様が動き出す、現在の画風につながっていることがよくわかる。だが、この発展の過程を細部にわたって読み解くことはわたしにはできない。

大学の二回生で、陶芸の技法を学びはじめたばかりの安田さんにとっても、それは相当の難題ではあっただろう。彼女が段ボールを開け絵画の梱包をほどいたとき、感動とともに、途方に暮れたようでもあったことを思い出す。手を加える余地など、どこにもないように見えるのだった。

ただ、展示された作品を見ると、悩んだすえ、えいっと開きなおって制作することもできたのだろうか。安田さんは小ぶりの陶器を絵画に貼りつけて、思いがけない対応を試みていた。安田さんと会うことをいつも楽しみにして（小躍りするほど）、作品の返答を心待ちにする山村さんが、彼女の挑戦を後押しすることもあったのかもしれない。

――

平井和樹さんと鮎川奈央子さんの作品は、展示空間にぐるりと並べられていた。それらをめぐれば、二人の思考も、手の動きも、ある程度は追跡することができる。吊り下げられた画用紙の裏には、鮎川さんのおおらかな字が共同制作の次の段階を促し（「平井さんの好きな生物を教えてください」）、それに対する応答もまた、平井さんの端正な言葉づかいで隣り合う作品の裏に記されている（「ぼくの作品はネズミとゴリラのゆうごうです」）。そんな掛け合いで、二人はモンタージュのようにお互いの好きな生き物を組み合わせて、ついには鳥と、犬と、猿の合体した「チュンワンザル」の像として、ギャラリーのまんなかに据えられた。

展示を終えて、平井さんは交換の過程がとても楽しかったと言った。そう言いながら、かたわらの鮎川さんのことをそれほど気にかけている様子は見せない。二人はあまり目もあわせない。

「オープンキッチン」の交換がはじまる前、平井さんと仲良くなりたいと鮎川さんが言っていたことを思い出す。仲良くなるとはどういうことなのか尋ねると、よく考えたあとで、こんな答が返ってきた。「同じ場所で、面と向かって話さなくても、「あ、いるな」って感じです。ずっと一緒にいるわけじゃないんですが、一瞬だけ来て、またどっか行く、みたいな」。

――

「オープンキッチン」の交換過程では、作品は段ボールにつめられ郵送される。それが届くのが待ち遠しくて、開封するのはドキドキする。舟木花さんと山口真琴さんの展示空間には、彩色された小箱とともに、大小の段ボールがクリスマスの朝のプレゼントみたいに山積みにされていた。その側面には二人の平面作品が張りつき、上面には紙片やワイヤーで作られた、怪物とも、異星人ともつかない小型の生きものたちが、腰かけたりへばりついたりしている。

山口さんは、独りごとのような、他人にはなかなか理解しがたい秘密の日記のようなものを送ってみたいと言っていた。そんな日記からは自分でも予期しなかったものが飛び出してくるのだと。たとえばどんなものですか?と尋ねると、変なたとえですけど、と前置きしてこう言った。「胎生で育った子どもというより、卵生で生まれてくる子どものような、そういう言葉のことです。その言葉の一つ一つが単独で行動することもあれば、共生することもある」。

二人の展示には、黒地のカンバスにたくさんの粒々がまだらにくっついている平面作品もあった。山積みされた段ボールの中腹あたりに立てかけられていたのを覚えている。舟木さんから送られてきた、大量のアイロンビーズが使われていた。その粒々はたしかに卵のようでもあるし、星雲のようでもあるが、ともかくウヨウヨ動き出しそうな気配があった。

――

もっと思い出されることはあるのだが、ここには書ききれない。どうやって書けばいいのか、まだわからないような瞬間もたくさんあって、それが「オープンキッチン」を現在につないでいる。

たんぽぽの家の脇坂風香さんは、引き出しのたくさんある木箱を持っている。両手でなんとか抱えられるほどのサイズで、底面をのぞく五面には彩られた紙がくっつき、それを貼りつけているテープもきらきらする。木箱の表面にも、親指と人差し指を丸めたくらいの大きさの円が蛍光色のペンでおびただしく描きこまれ、全体として、派手にいたずらされたマンションのミニチュア、といった印象。近寄ると、脇坂さんは小枝のような棒を引き出しの取手にひっかけ、おごそかにその内部を見せてくれる。それぞれの引き出しは、底面から、角、へりに至るまで塗られていて、

回転させるとそのつど発見がある。それで、はらはらと折りたたまれた手紙が落ちてくるから、その半透明の紙をひらくと、わたしには読めない極小の文字が記されているのだった。

「オープンキッチン」はあの木箱のようなもので、いろいろと見せたいものはあるのに、解読できないものが多すぎて、すべてをお示しすることはとてもできない。脇坂さんの小枝みたいに、小箱をすうっと引き出してくることが自分にもできれば、と悔しがっている。

——

——

京都市立芸術大学 講師

永守伸年

OPEN KITCHEN
京都

京都展

2019年04月03日(水)――04月14日(日)

@ギャラリー崇仁

奈良展

2019年04月23日(火)――05月24日(金)

@たんぽぽの家アートセンターHANAギャラリー

ギャラリートーク

2019年05月18日(土)

@たんぽぽの家アートセンターHANAギャラリー

主催|京都市立芸術大学

共催|一般財団法人たんぽぽの家、社会福祉法人わたぼうしの会[たんぽぽの家アートセンターHANA]

出展作家|青木克考、鮎川奈央子、萩原宏一郎、平井和樹、平田万葉、福島周平、舟木花、水田篤紀、毛利愛実子、ヤスダヒナ野、山口真琴、山村晃弘

――

展覧会テキスト・インタビュー編集|河原雪花、小林奏子

協力|大井卓也(一般財団法人たんぽぽの家)、吉永朋希(社会福祉法人わたぼうしの会[たんぽぽの家アートセンターHANA])、永守伸年(京都市立芸術大学 講師)

撮影|関人愷

装丁・DTP|平本嵩

展覧会構成・展示計画・編集|寺岡波瑠

著作刊行者|寺岡波瑠、永守伸年

――

発行日

発行所

印刷所

本研究はJSPS科研費19K12924(「信頼」概念に着目した関係的かつ感情的な自律概念の研究)の助成を受けたものです。

OPEN KITCHEN
京都

京都展

2019年04月03日(水)──04月14日(日)

@ギャラリー崇仁

奈良展

2019年04月23日(火)──05月24日(金)

@たんぽぽの家アートセンターHANAギャラリー

ギャラリートーク

2019年05月18日(土)

@たんぽぽの家アートセンターHANAギャラリー

主催|京都市立芸術大学

共催|一般財団法人たんぽぽの家、社会福祉法人わたぼうしの会 [たんぽぽの家アートセンターHANA]

出展作家|青木克考、鮎川奈央子、萩原宏一郎、平井和樹、平田万葉、福島周平、舟木花、水田篤紀、毛利愛実子、ヤスダヒナ野、山口真琴、山村晃弘

──

展覧会テキスト・インタビュー編集|河原雪花、小林奏子

協力|大井卓也(一般財団法人たんぽぽの家)、吉永朋希(社会福祉法人わたぼうしの会 [たんぽぽの家アートセンターHANA])、永守伸年(京都市立芸術大学 講師)

撮影|関人愷

装丁・DTP|平本嵩

展覧会構成・展示計画・編集|寺岡波瑠

著作刊行者|寺岡波瑠、永守伸年

──

発行日

発行所

印刷所

本研究はJSPS科研費19K12924(「信頼」概念に着目した関係的かつ感情的な自律概念の研究)の助成を受けたものです。

には、なんらかの「ゴール」が設定される。それは作品であったり、展覧会であったりするだろうが、参加者たちはその共通のゴールに向けて制作を続けていく。そうして作り上げられた作品は彼らの思いが一つにつながった「結束点」のようなものだろう。

一方、先述のように、アートラリーのコラボレーションにおいては、参加者たちはお互いに分かりあえないまま、並走するように協働を続けてきた。こういったプロセスから生み出された作品たちは、お互いの結束点とはなりえず、ラリーという不完全なコミュニケーションの、その時その時の状態を映す副産物である。また、このラリーというプロセス自体には終わりがない（しようと思えばずっとラリーし続けることもできた）ため、ゴールとしての展覧会を設定することも難しかったのだろう。

ただし、もちろん、この冊子にも記録が掲載されているように、本プロジェクトは最終的には展覧会と言う形にまとめ上げられた。これは参加者たちの「ここで生まれた交流を、発信しないことは逆にもったいない」、「作品としてつくっている以上、他者に鑑賞されることも必要だろう」といった意見から実現したものである。しかし、本展覧会は完成された作品を発表する場ではなく、未完成なプロセスをありのまま見せる空間となった。つまり、本プロジェクトは作品や展覧会といったゴールとしての点をつないでいくプロセスではなく、それぞれの参加者が気ままな交流を重ねていく、線のように紡がれるアートプロジェクトであり、それらの線が一時的に集まった空間があの展覧会であったのだろう。続いて、1つのペアの展示から、アートラリーのあり方をさらに深めて考えてみたい。

——

身体的な会話の地図?:福島×水田ペアの取り組み

福島周平さん、水田篤紀さんのペアの展示作品は、他のペアに比べて独特なものであった。彼らはアートラリーの間はスケッチブックに描かれたドローイングの送りあいをしていたものの、展覧会ではそのスケッチブックは展示せず、展覧会場にてライブペインティングを行い、新たなドローイングを制作、展示していた。

展覧会の搬入日、作業を進める福島さんが「何を展示すれば良いか分からないんですよね」と言っていたことを覚えている。これは展覧会を進めるメンバーとしては準備不足ととらえられてしまう発言だったかもしれない。また、ラリーのなかで積み重ねられた作品ではなく、ライブで制作した作品を展示するということは、一見するとアートラリーのルールから離れてしまうようにも思える。

しかし一歩引いてみると、彼らの展示には彼らなりのアートラリーへの解釈が表れているようにも見える。恐らく彼らにとって、取り交わしていたスケッチブックはあくまでやり取りの一面に過ぎず、実際には、関係性や身振りといった、たくさんの無形のものが二人の間に積みあがっていたのだろう。そして彼らはライブペインティングを通じて、その積みあげてきた無形の対話を、リアルタイムでつくり出すやり取りの痕跡、まさにドローイング（=引いた跡）として提示したのかもしれない。

大判のキャンバスに描かれた彼らの作品を見ると、縦横に引かれた格子状の線のなかに、図形やラインが複雑に配置され、ところどころ重なりあったり、時に分断され、地形図のように広がっている。きっと、彼らが紡いだラリーの線=道のりをたどるには、このような身体的で曲がりくねった地図が必要なのだろう。

——

ラリーはつづく

以上、本稿ではアートラリーを、アートをメディアとした不完全なコミュニケーションと、その結果として生まれる、結束点を持たない線としてのアートプロジェクトという視点から分析してきた。概して言うならばアートラリーは、アートという曖昧なものをはさみ、交流を行うことで、コミュニケーションのあり方を問い直す試みであったといえるかもしれない。

そして最後に大切なことは、このプロジェクトは展示によって終わったのではないということだ。たしかに、アートラリーの作品のやり取り自体は展覧会をもって一旦終了している。しかし先述したように、この展覧会は参加者それぞれが紡いでいる糸が一時的に集まったものであり、ゴールではなかった。きっと、今後もそれぞれの参加者が自分の表現活動を続けていくなかで、誰かと出会いなおしたり、新たな出会いが生まれたりするのだろう。その折々に、新たなラリーがつながっていくことを期待している。

——

——

一般財団法人たんぽぽの家

大井卓也

不完全なコミュニケーション・線としてのアートプロジェクト

近年、障害のある人のアート活動に注目が集まるなか、アーティストが福祉施設とコラボレーションして作品を制作したり、障害の有無に関わらず、誰もが参加できるアートワークショップが開催されるなど、多様な協働の機会が生まれつつある。また、学生と障害のある人のコラボレーションに関しても、美術分野だけではなく、デザイン、建築、工学、地域振興など、幅広い分野で様々な試みが行われている。

さて今回、たんぽぽの家アートセンターHANAのアーティストと京都市立芸術大学の学生有志たちの間で交わされた「アートラリー」も、一口に言えば障害のある人と芸術を学ぶ学生とのコラボレーションによる作品制作の取り組みであったといえるだろう。しかし、自身がプロジェクトに関わった立場からすると、このプロジェクトには一般的なコラボレーションではとらえきれないいくつかの特色があったようにも感じられる。本稿ではそれらの特色を、プロジェクトのプロセスに焦点を当て、やや俯瞰的に考察してみたい。

――

不完全なコミュニケーション

まず、本プロジェクトの第一の特色は参加者同士の交流の方法にあったように思われる。一般的に、障害のあるなしを問わず、アーティストと誰かがコラボレーションを行う場合、その一つの目的には「相互理解」というキーワードがあげられることが多いように感じられる。コラボレーションを通じ、お互いの思いや意見を交換しあい、協働して一つの作品に向きあっていく、そんなイメージが浮かぶのではないだろうか。例えば、本プロジェクトであれば「アートを通じて障害のある人と学生が交流し、理解しあう」といった目的設定も可能だったかもしれない。

しかし、本プロジェクトにおいては、そういった目的は特に設定されておらず、また、交流のあり方はそれぞれの参加者にゆだねられており、学生にせよたんぽぽの家のメンバーにせよ、お互いに「分かりあえない」状態での交流が続いていたように見受けられる。この分かりあえなさの理由の一つとしては、もちろん、たんぽぽの家のメンバーたちに障害があるということもあげられるだろう。彼らのなかには言葉でのコミュニケーションが難しく、意思や感情の読み取りが難しいメンバーもいる（また、本プロジェクトにおいては、彼らの障害特性や支援の方法を学生に説明する、といったいわゆる「障害理解」のような時間もあえて設けていなかった）。しかし、なによりも大きな理由としては、このアートラリーのプロセスそのものがあげられるだろう。

アートラリーとは、たんぽぽの家のメンバーと京都市立芸大の学生が、互いに作品を郵送で送りあい、共同制作をしていくというプロセスのコラボレーションであった。ラリーの相手がどのような人で、何を考えているのかは、主にその送られてきた作品を通じてしか読み取れず、また、その返答も作品を通じて行われる。このように、アートをクッションにした、ある種不完全なコミュニケーションのあり方が、この分からなさを生んだのではないだろうか。

――

霧の中にいるようです。白く煙ってなにも見えないのですがただ居心地はよくて私はゆらゆら漂います。この霧の中にはたくさんの人がいて時たま気配だけが感じられます。彼らに手を振れば振り返してくれたりくれなかったりします。ゆっくり霧に目を凝らすと彼らは遊んだり作ったりお互いを観察しあったりしているのがなんとなくわかります。はっきり見えるのは自分の手元だけなのですがそれは彼らもそうなのだろうと思います。（後略）（河原雪花　本プロジェクトのステートメントより）

――

これは、本プロジェクトに関わった京都市立芸大のメンバー、河原雪花さんによるテキストである。ここには、参加者たちがプロジェクトの最中に感じていた身体的な感覚が読み取れるように思う。お互いに何を感じ、考えているのか、はっきりと分かりあうことはできないものの、やり取りされる作品の表面に残るてざわりを手掛かりに、その背後にいるはずの姿を想像しあい、返答を重ねていく。

通常、私たちは人と出会い、交流を重ねる時、お互いに理解しあえる、もしくは理解しあえない点を確認しながら、共有されるビジョンを形成していく。しかし本プロジェクトにおいては、作品というメディアを挟み、お互いの想像によるコミュニケーションを重ねていくため、必然的にそこには分かりあえない部分や、誤解、誤読、疑問、といったモヤモヤが残り、積層していく。それらのモヤモヤは不確かなものではありながらも、不快ではない。そんな少し変わった交流の方法が、本プロジェクトの骨子になっていたのではないだろうか。そしてこの交流の形態は、プロジェクト全体の進行にも影響を与えている。

――

線としてのアートプロジェクト

プロジェクトを進めるなか、参加者の間で議論になったのが「展覧会を行うべきだろうか」という点だった。議論のなかでは「このプロジェクトの主なテーマは作品を通しての交流であって、完成された作品をつくることではないため、そもそも展覧会ができるのか分からない」といった声が聞かれたが、この意見は示唆的だろう。

通常、複数の参加者のコラボレーションによるアートプロジェクトを行う場合

2018年夏　たんぽぽのメンバーが京芸に遊びに来た日

会場の様子

奈良展

会期|2019年4月23日(火)――5月24日(金)

会場|たんぽぽの家アートセンターHANAギャラリー

京都展

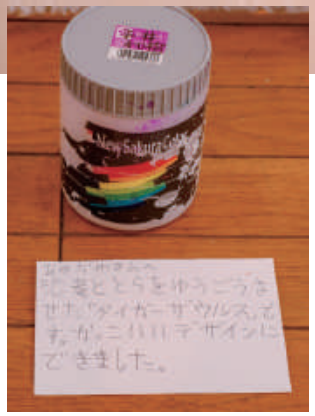
会期|2019年4月3日(水)——4月14日(日)

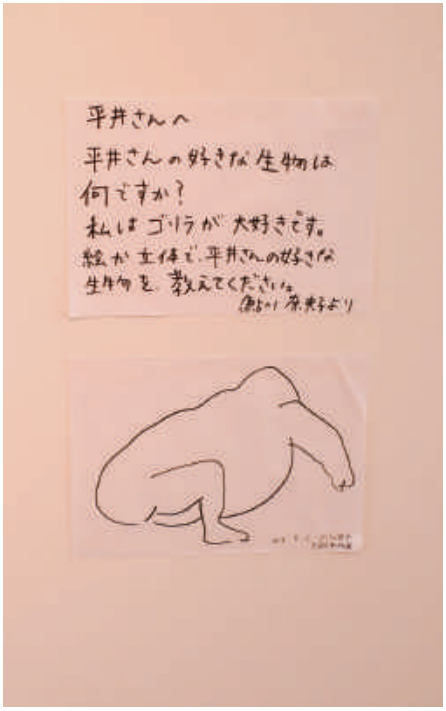
会場|ギャラリー崇仁

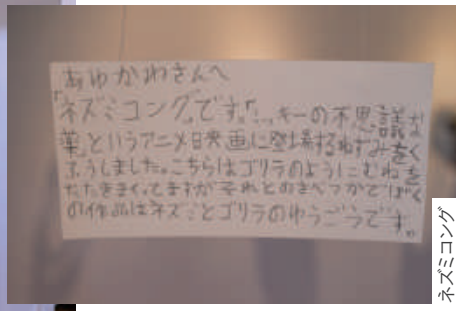
会場の様子

彼には今何が
見えているの
だろう。
彼女はその
線に

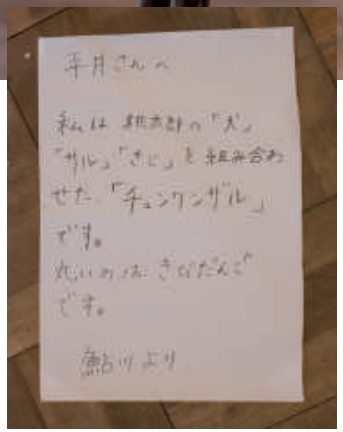
タイガーザウルス







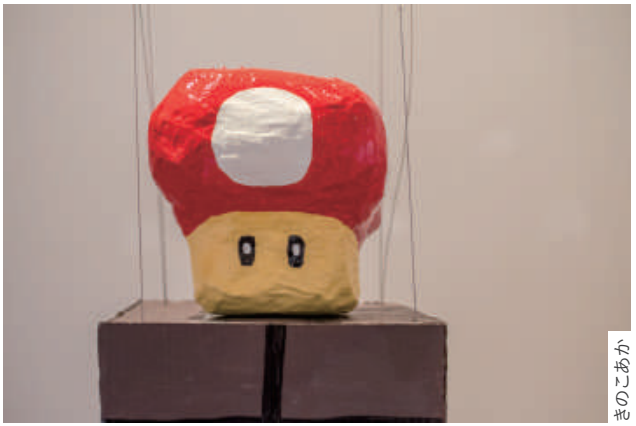
ネズミコング



チュンワンざる

平井さんの道具

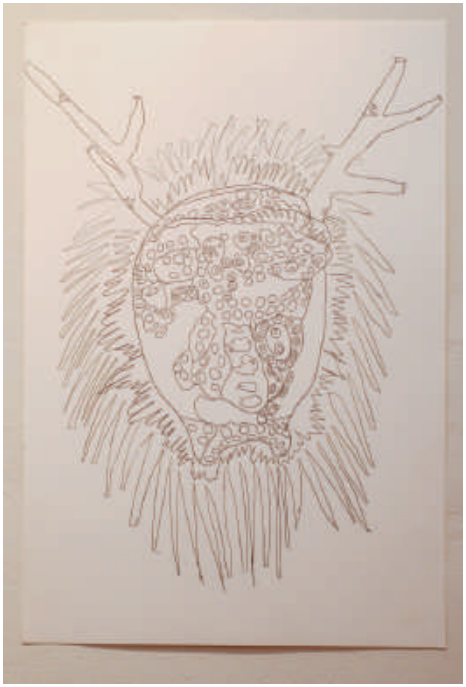
きのこみどり



きのこあか

Hommage MASK 02

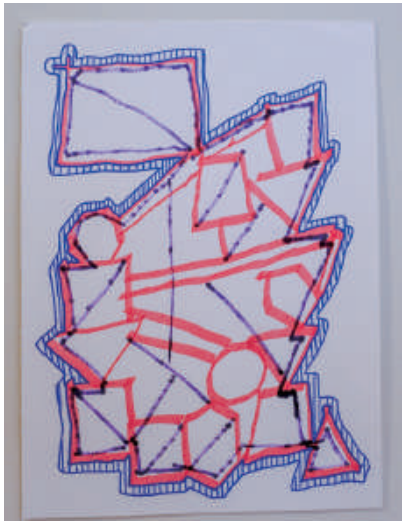
Soil MASK

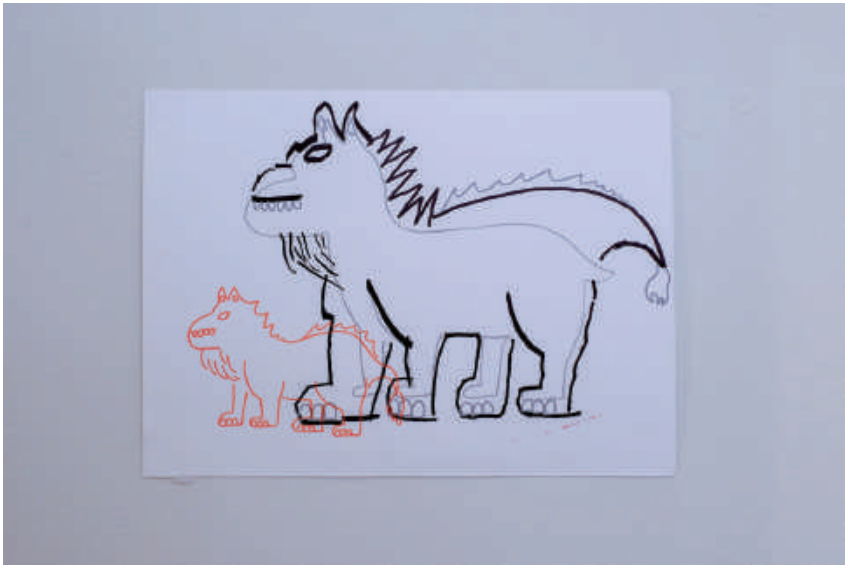


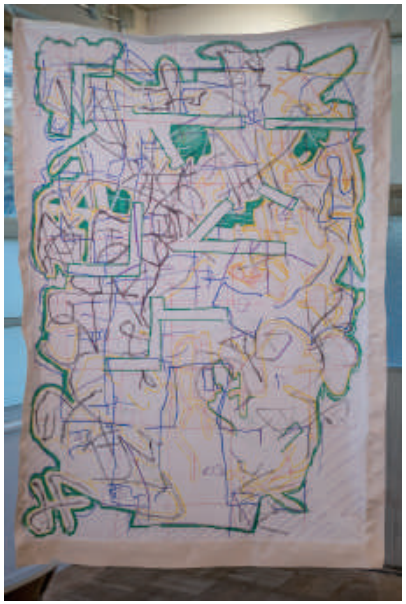
Hommage MASK 01

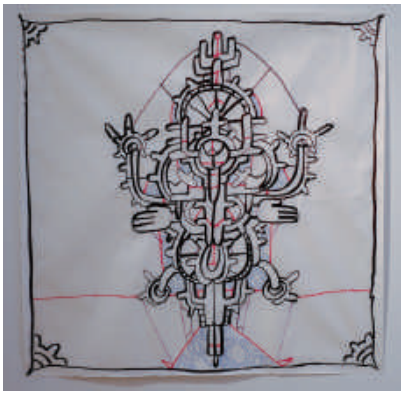
平田万葉、萩原宏一郎

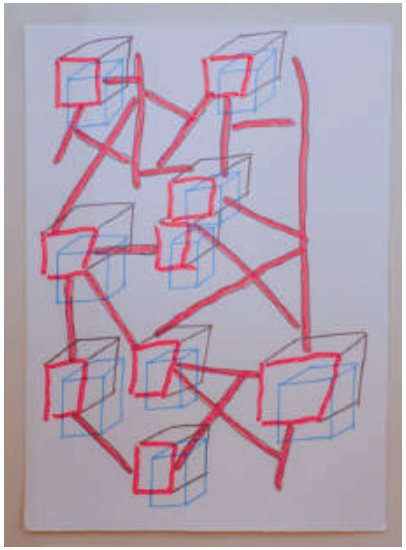
鳥
午
百
馬
貝
王
兆
揚

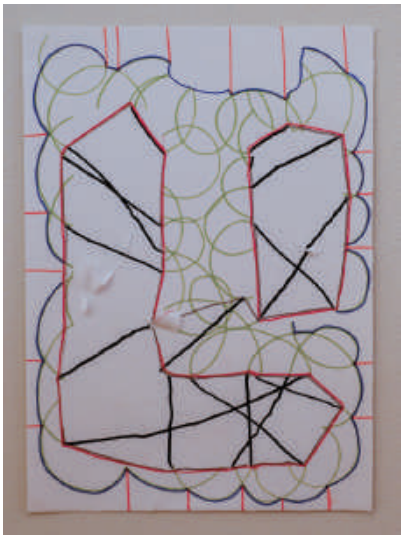


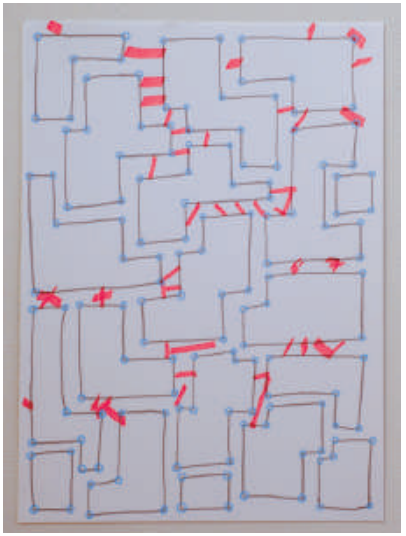






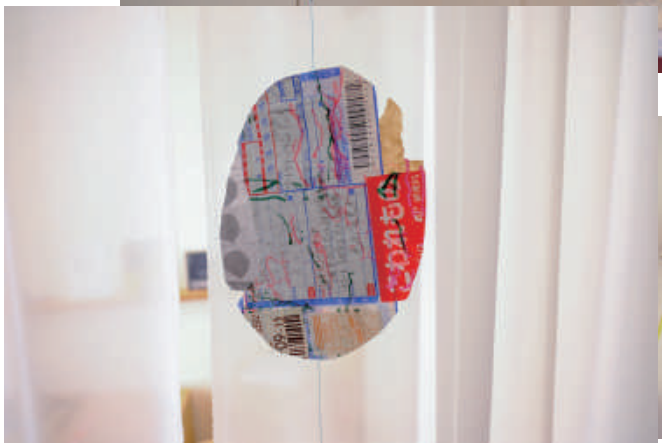




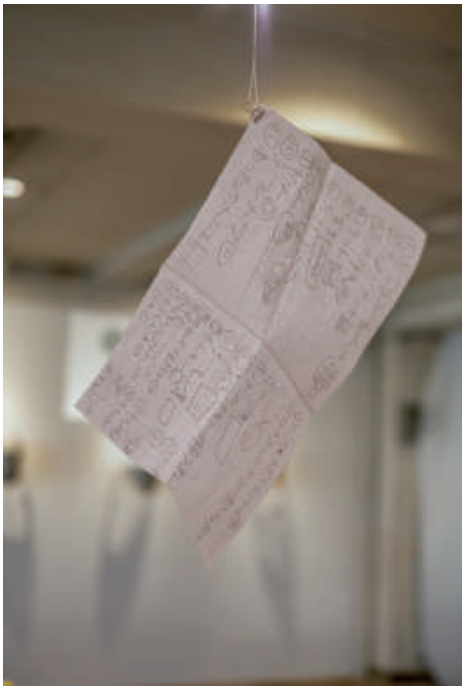


ライブペインティング

AOKI Katsutoshi, MORI Amiko

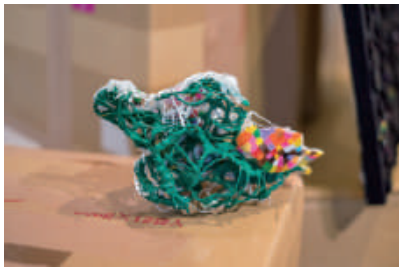


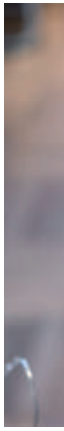
毎日をなぞる



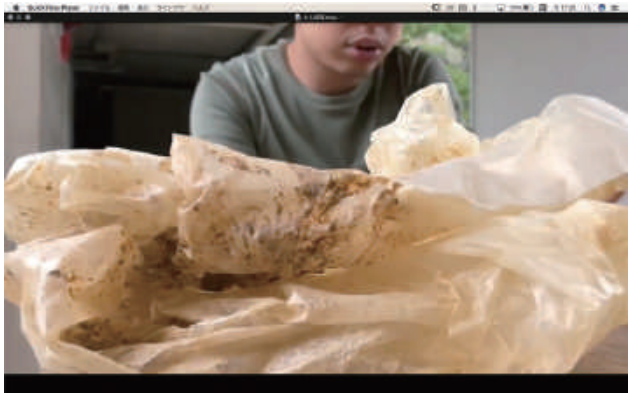
ゾクゾク運動会

ヤスダヒナ野、山村晃弘





舟木花、山口真琴



記録者|鮎川奈央子

パートナー|平井和樹

記録メディア|動画、写真

メモ|

（平井さん=H、鮎川さん=A）

H:「えーっと、ぼ、じゃなかった。……じゃなかった。なんだったっけ〜」

A:「はい。」

H:「え〜っと、僕には、え〜っと。田舎に親戚がいます。」

A:「はい。田舎に……」

H:「（かぶり気味に）田舎に親戚がいます。」

A:「はい。」

H:「田舎に親戚がいます。それで、えーっと。鶏を飼っています。」

A:「え!そうなんですか!?」

H:「（身を乗り出す。）あア!!!!」

A:「あっ!!」

——HがAの顔を叩く。

A:「あぁ。蚊がいた?ははは。」

H:「すいません!!」

A:「いやいや……」

H:「すいません!!つねったりして!!」

A:「全然!」

H:「すいません!!つねったりして!!」

A:「全然。大丈夫です。……ありがとうございます。」

H:「手洗ってくる。」

A:「はい。手はこっちで洗えます。」

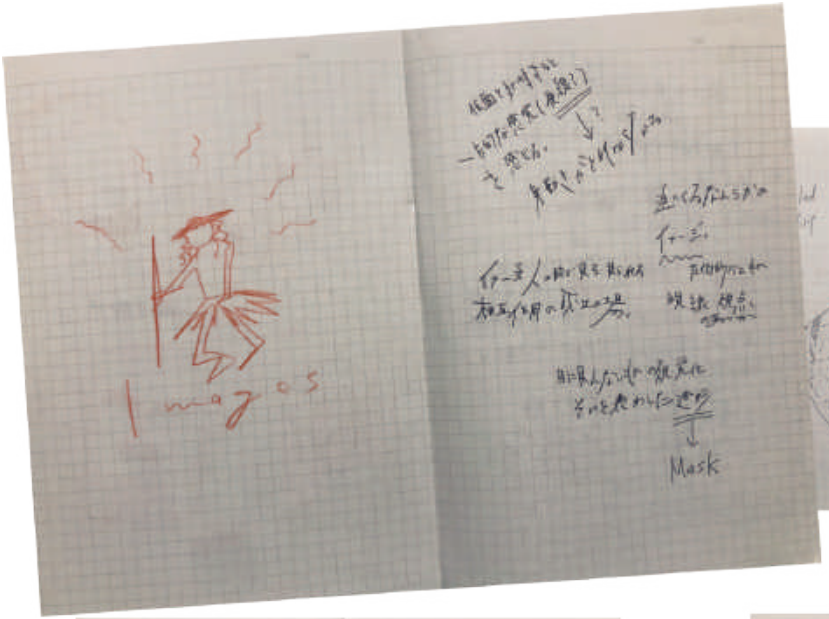
——H手を洗いに行く。そして、戻ってきて、再び粘土をこね始める。

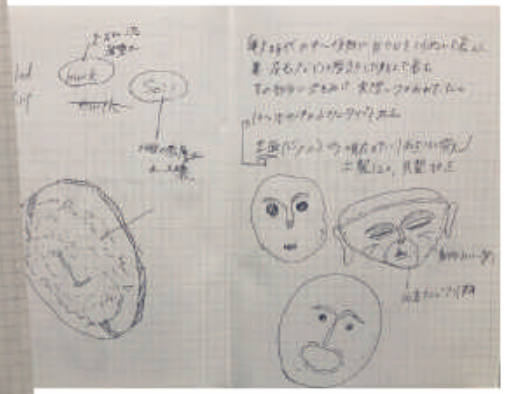
H:「蚊取り線香持ってきたよ〜。」

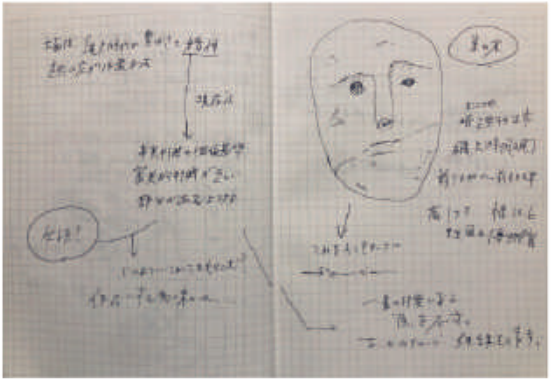
A:「ありがとうございます。やっぱり虫が。」

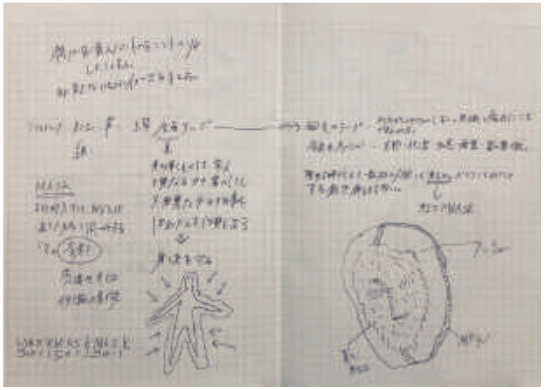
H:「やっつけたー……蚊を殺しちゃった。」

——H粘土をこね続ける。







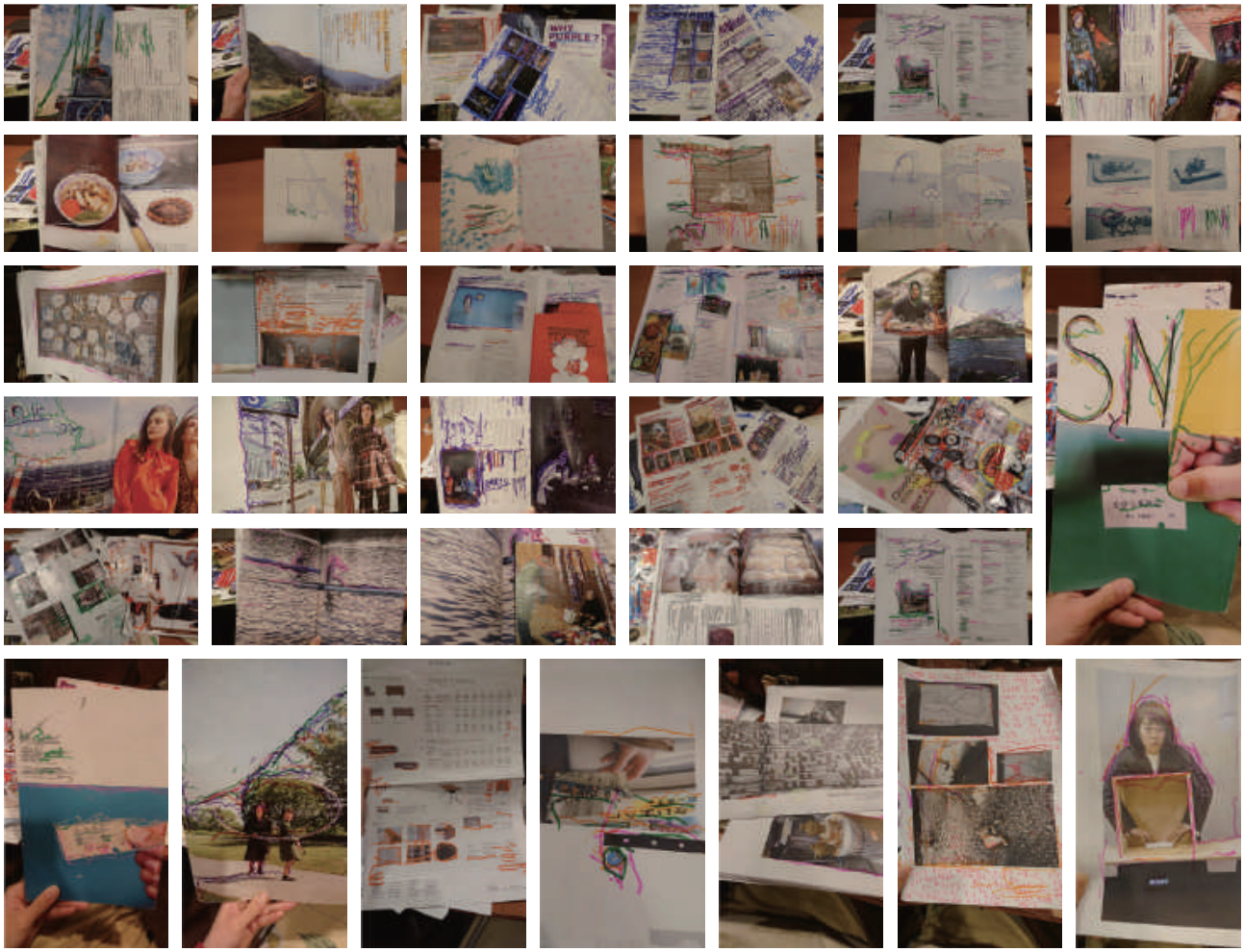


記録者|平田万葉

パートナー|萩原宏一郎

記録メディア|アイディアノート

メモ|

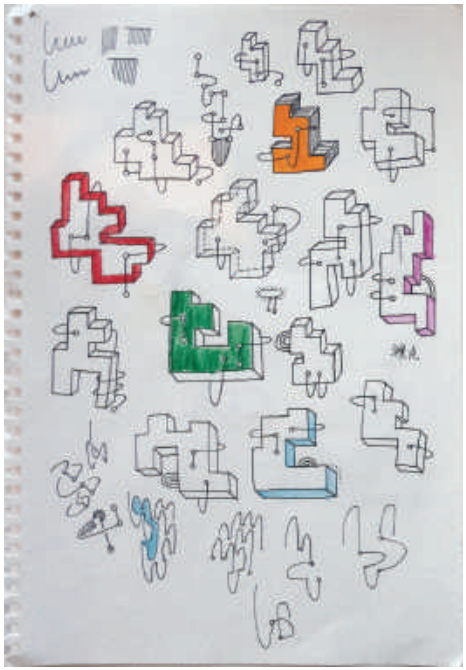


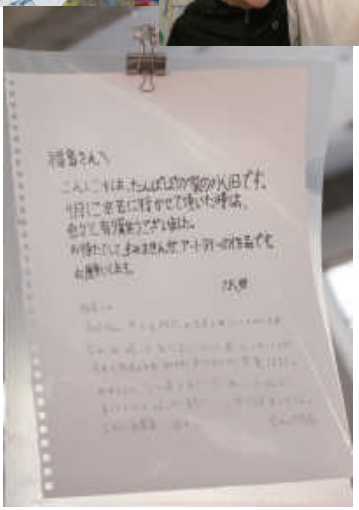
記録者|毛利愛実子

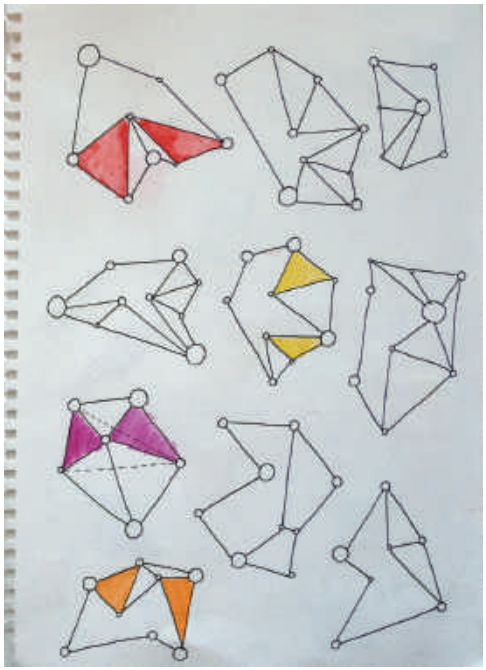
パートナー|青木克考

記録メディア|チラシ、写真、粘土

メモ|







記録者|福島周平

パートナー|水田篤紀

記録メディア|スケッチブック、手紙

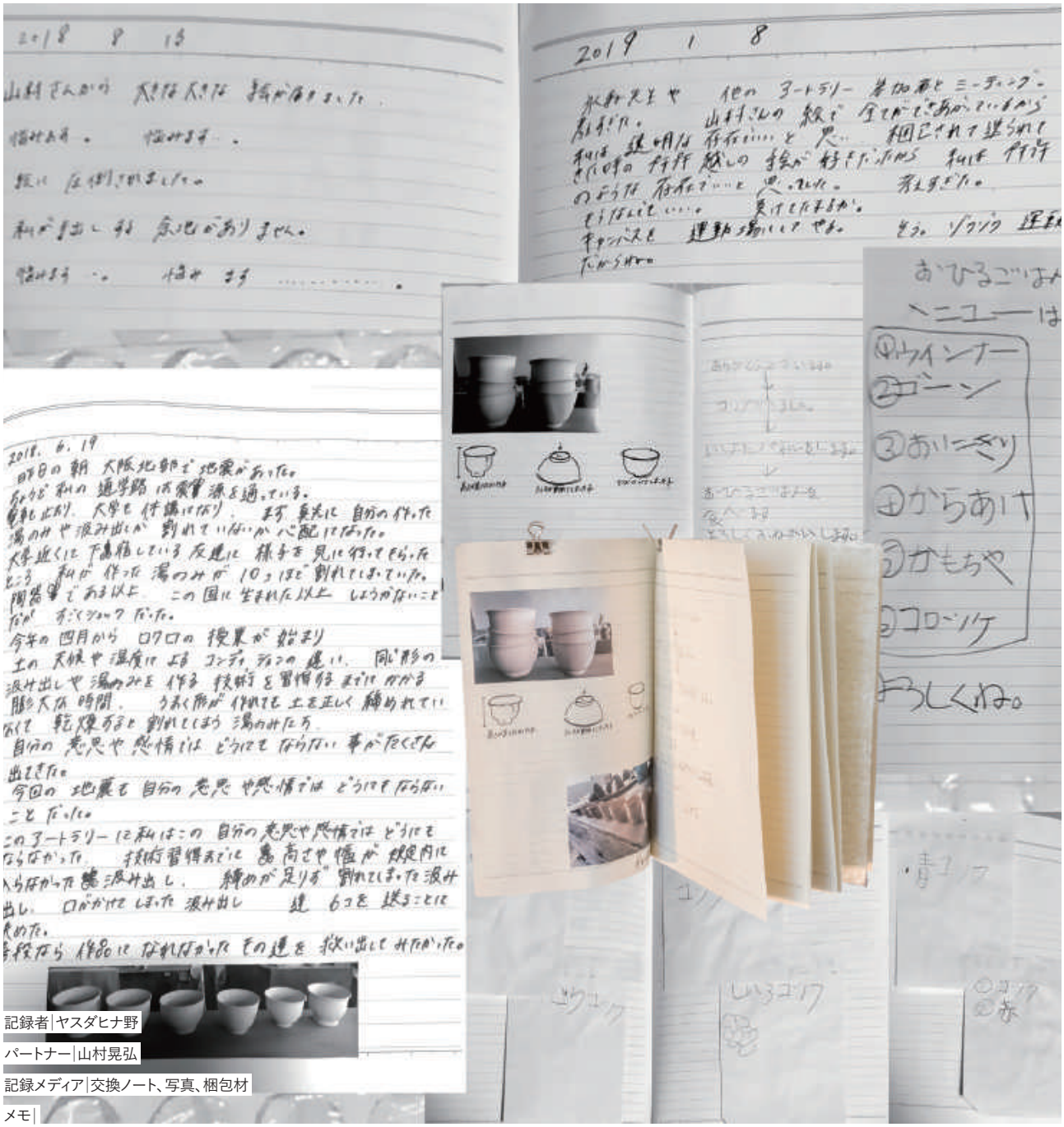
メモ|

記録者｜山口真琴

パートナー｜舟木花

記録メディア｜シュレッダーにかけられた紙くず、ガラス容器、塗装されたダンボール

メモ｜



記録者|ヤスダヒナ野

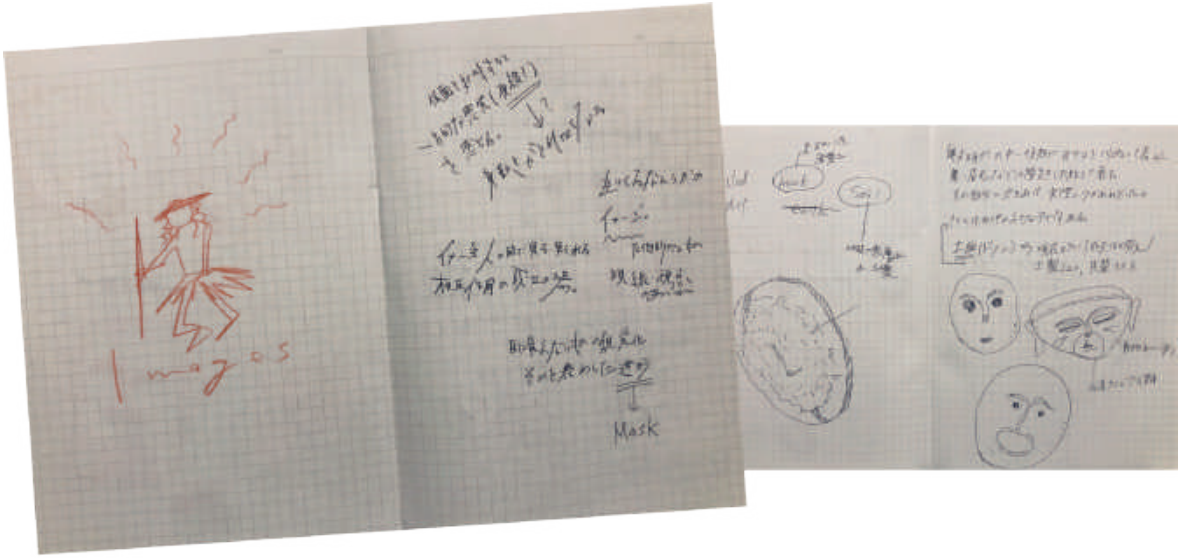
パートナー|山村晃弘

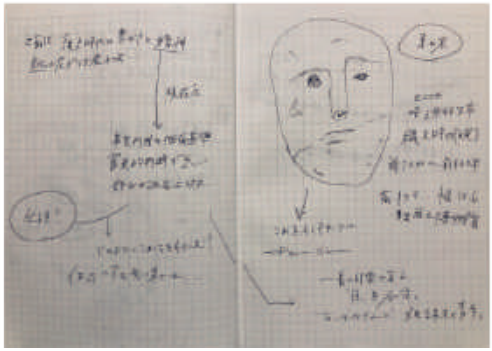
記録メディア|交換ノート、写真、梱包材

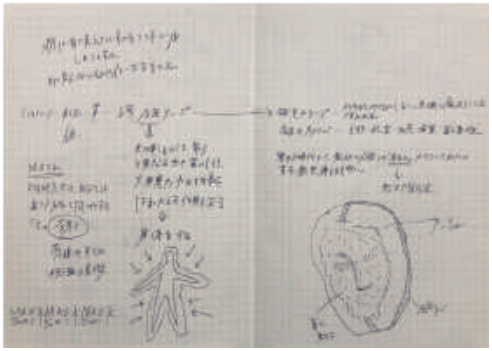
メモ|

作品ラリーの記録について

記録というものは、綺麗にまとめられた資料になる以前の状態に浪漫を感じます。それは、整頓されていないが、誰かの私性によって採集されたものであり、未完成なものです。以前たんぽぽのスタッフの方が、作品ラリーには浪漫を感じると言っていたのがとても印象に残っています。確かに作品ラリーという、郵送で京芸の学生とたんぽぽのメンバーが作品を取り交わすというのは、一見まどろっこしい行為のように思えます。しかし、段ボールに作品を詰める時、届いた段ボールを開ける時に、心臓が高鳴るのを感じます。学生たちは、何か決められた記録方法というものを提示されることはなく、気の向くままに個々の記録方法を決めて記録しています。それは、一般的な記録という枠組みからはみ出たものも多く、私にとって記録とは一体何だろうという言葉への疑問を生むキッカケとなりました。彼ら彼女らから与えられた、それらの記録は作品ラリーでつくりだされた作品と言われるものと、同等の価値の存在のように思います。そこで、記録を展覧会で展示する計画を立てました。







記録者|平田万葉　＞＞＞＞＞＞＞＞［記録方法を考えて記録した人物］

パートナー|萩原宏一郎 ＞＞＞＞＞＞［記録に登場する人物］

記録メディア|アイディアノート　＞＞＞［彼ら彼女らが思う記録］

メモ|　＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞［この記録を通して、あなたが残しておきたいと思った感情や言葉を記録してください］

たんぽぽの家

［写真：衣笠名津美］

「アート」と「ケア」の視点から、奈良市を拠点に活動する市民団体。障害のある人がアート活動を仕事にする福祉施設を運営し、絵画や立体、パフォーマンスなど、様々な方法で表現を発信しています。また、アートと社会の新しい関係をつくるプロジェクトや、大学や企業と協働した取り組みを行なっています。

—

山村晃弘(パートナー:ヤスダヒナ野)

ヤスダさんからはじまったアートラリー。送られてきた作品は陶器の湯呑みと制作ノートで、山村さんは海の魚や動物の絵を描きました。合わせて送った50号の絵画作品は、国内外での出展経験がある山村さんの新作で、1つの絵としても完成度が高い作品でした。山村さんはとても作業が早いので、他の作品と同時並行しながら数日で描きあげます。ラリーをしている自覚はしっかりとありながらも、自身のスタンスは崩さずに作品を作る山村さん。そんな山村さんに何か仕掛けようとするヤスダさん。噛み合いそうで噛み合わない2人の、なんともいえないもどかしさが滲み出たラリーでした。

—

オープンキッチンを終えて

言葉は少なくてもなんとなく通じ合った気持ちになれたり、互いに共感できるところが見つかって嬉しかったり、すれ違いを感じながらもなんとか歩み寄ってみたり…。このアートラリーは、かたちにならないそんな想いや出来事を「作品」とよび、それを作り上げていく機会だったように思います。

オープンキッチンの最後には、たんぽぽの家のギャラリーでアーティストトークを開催しました。舟木さんは制作がしたいからとイベントには参加せず、水田さんは各ペアにぶっこむような質問をし、山村・ヤスダペアはヤスダさんが遠方からのスカイプ参加と最後まで微妙にすれ違う。それでもトークは大盛り上がりで幕をとじ、そのなんともいえない豊かな光景に、アートを介したコミュニケーションの可能性を感じました。

—

—

社会福祉法人わたぼうしの会
たんぽぽの家アートセンターHANA
アートディレクター　吉永朋希

アートを介した コミュニケーションの可能性

障害のある人と芸大生との協働

「オープンキッチン」に参加するたんぽぽの家の障害のあるメンバーを選んだのは、京都市立芸術大学の学生たちです。学生たちの選び方はとても面白く「さっきすれ違った、あそこで独り言を言っていた人とやりたい」「本人の姿は見ていないけど、窓のそばに置いてあったチラシに絵を描いた人」など、たった半日の訪問でこれから1年間ともに協働制作をするペアを決めていました。

選ばれた6人の中には、普段の活動では、誰かと協働することが難しいメンバーもいて、学生たちは、たんぽぽの家のスタッフとは全く違う発想でペアを決めていました。私たちもいつかは表現の機会を作りたいと思っていましたが、上手くいかないのではないかという不安の方が大きかったです。そういう意味で、オープンキッチンはたんぽぽの家にとって大きなチャレンジでした。

—

それぞれのアートラリー

アートラリーでのスタッフの役割は①メンバーの決定を全て受け入れること②本人のペースを大切に完成を急かさないこと（ラリーの回数にこだわらない）③完成次第速やかに発送すること、でした。

—

青木克考（パートナー：毛利愛実子）

青木さんは、身体・知的・精神・聴覚の4つの障害が重複しているメンバーで、コミュニケーションをとることが難しく、今回のような協働制作もはじめてでした。たんぽぽの家では、スタッフやボランティアが持ってきたチラシや雑誌の気になるところに線を引く制作をしています。ラリーのはじめに、毛利さんから送られてきたものは陶器の立体作品でした。しかし青木さんが関心を示したのは、作品が入っていた段ボールに貼ってある宛名書き。結局立体作品には何もせずに終わりました。青木さんがアートラリーの意味をどこまで認識していたかはわかりませんが、毛利さんがたんぽぽの家に来てくれるときはいつも機嫌よく接していました。

—

萩原宏一郎（パートナー：平田万葉）

このペアのラリーの一番手は萩原さん。送った作品は過去に展覧会にも出品したことがある、張り子のお面。7つあったシリーズの中でも一番良い2つを自身で選びました。これは彼の代表作で、たんぽぽの家としては絶対に手放さない作品でしたが、このプロジェクトは本人の決定を尊重するという趣旨だから…とやむなく承諾し、平田さんに発送。萩原さんは一本気な性格なので、自身の一番良い作品をアートラリーにぶつけたんだと思います。返ってきたものは針金と土で作った全く別の作品でしたが、ひるむことなく新聞紙を貼りつけ、今の自分を表現していました。

—

平井和樹（パートナー：鮎川奈央子）

平井さんは自閉症で、彼とのコミュニケーションをとる際には人となりを知った上での伝え方が重要で、それなりの経験が必要になります。そのようなところが、外部の方との協働がしにくいと判断していました。しかし実際にラリーをしてみると、このペアが最も回数をこなしていて、手紙も送りあっています。「スーパーキノコを作ったから鮎川さんは1UPキノコを作ってください。」「1UPキノコありがとうございます。今月の最後の木曜日にゾウさんの絵を持って行きます。」など、普通にコミュニケーションをとっている。京芸にお邪魔したときも鮎川さんとおしゃべりをしながら一緒に作品を作っていました。今年で一番楽しかったことは?と聞いたときに「大学に行ったこと!」と言っていたのが印象的でした。

—

舟木花（パートナー：山口真琴）

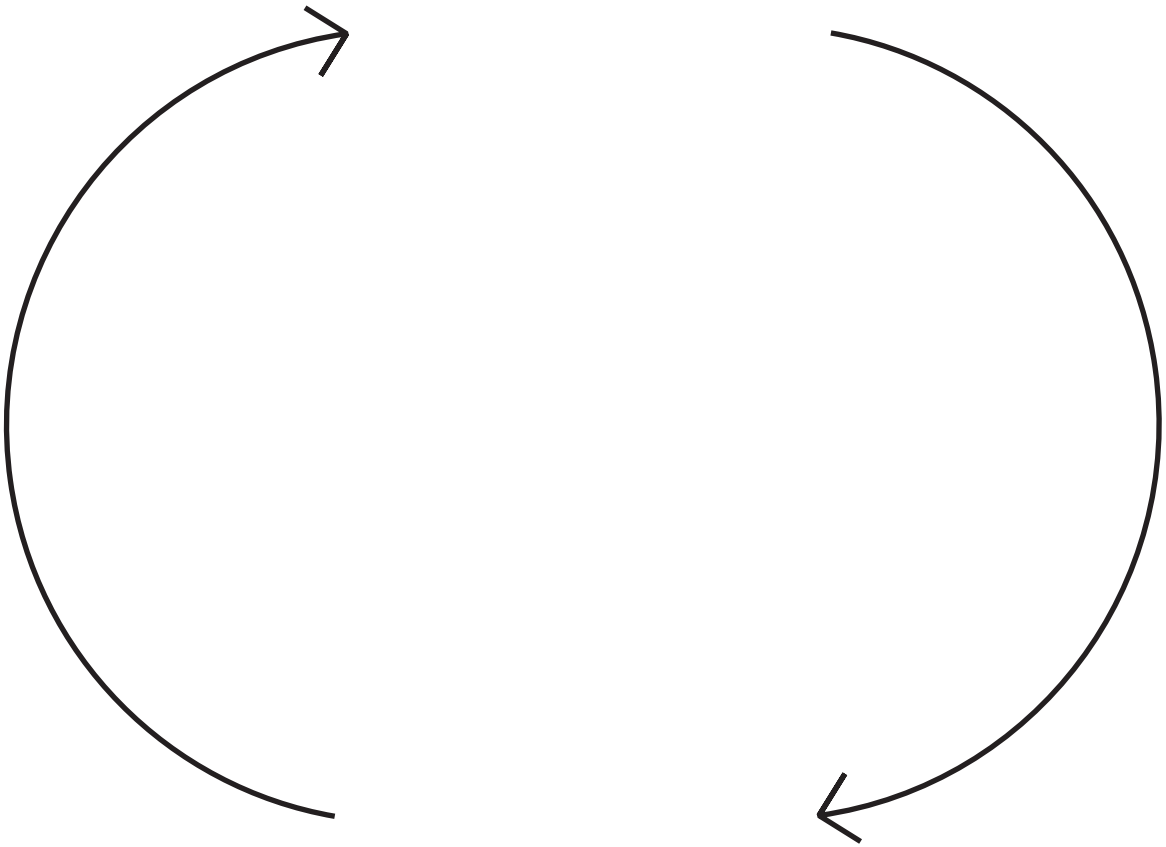
舟木さんは、当時20歳で、たんぽぽの家では一番若いメンバーでした。創作が好きで、熱中すると絵の具のボトルを使い切るまで塗りたくり、カラーテープもなくなるまで貼り続けます。様々な画材や素材に関心があり、その時々のブームで作品を生み出していきます。そんな調子なので、舟木さんがラリーを理解していたかどうかはわかりません。山口さんが送ってくれた鳥の立体作品にも、迷いなく絵の具を塗りたくっていましたが、恐らく何が送られてもそのようにしていたかもしれません。しかし、山口さんのラリーのインタビューを聞くと「互いのブームとブームを交換しあっている感じ」と意外にも伝わっていました。

—

水田篤紀（パートナー：福島周平）

初回の福島さんから送られてきた作品は、ドローイングが描かれたスケッチブック。水田さんが、まず始めに行ったことは、作品を読み込むことでした。半日ほど作品を見た後、スタッフと画材の相談をして制作がスタート。水田さんは「福島さんの絵が独特だったので、あらゆるところに水彩色鉛筆で色を塗り、面白くして返そう」と思いながら制作したそうです。展覧会では初日に2人で行ったライブペインティングの作品を展示。画面を四等分にして交互に描くというルールのもと描きました。出来上がった作品に対して水田さんは「福島さんが何を考えて描いているかわからなかったのが、良い意味で自分にも作用し、面白い作品になった」と語っていました。

OPEN



KITCHEN

ここは白の世界、霧がたちこめています。

私が歩みはじめると、ふっと上からあたたかい何かを感じました。

木漏れ日のような光の筋がいくつも降り注ぎ、彼らの行く手を照らしています。

その光は薄い布のように、時には糸のように細くなり、

表情をころころと変えていきます。

彼らは、何かを紡いでいるようです。

彼らが見ようとしているモノはどこか違うようです。

霧は彼らの周りをとりまき、

見えているものを次第に真っ白にしてしまうかもしれません。

また光の雨が降り注ぎます。